

---

# 魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s - 生き残った特攻隊員 -

珠鋼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers - 生き残った特攻隊員 -

### 【Nコード】

N3449V

### 【作者名】

珠鋼

### 【あらすじ】

1945年8月13日、この日、新型爆弾を積んだ一機の人間爆弾『桜花』がアメリカ艦隊を殲滅すべく出撃した。攻撃は無事成功し、『桜花』とそのパイロットである少年は共に戦場で散った……はずだった。だが、何の因果か少年は生き残り、拳銃時代も技術レベルも異なる異世界ミッドチルダへと飛ばされてしまう。果たして、彼は異世界で何を信じ、何の為に戦うのか。

この物語はもしもなのはの世界に旧軍の少年兵が放り込まれたら、

という考えのもとに生まれたものです。「不謹慎だ!」という方、  
二次創作はアカンという方は今すぐ戻ることを推奨します。

第一話「乾坤一擲、皇国の興廢この特攻にあり」（前書き）

はじめまして珠鋼です。

タイトルでも述べたように「不謹慎だ！」と思われる方や二次創作を受け付けない方は戻ることを推奨します。

それでも構わない、見てやるぜ！という方は本編にどうぞ。

第一話「乾坤一擲、皇国の興廢この特攻にあり」

1945年8月13日

「うさぎを追いし、かのやーま」

狭苦しい操縦席の中、少年の歌声が響いていた。

「小一鮒釣りし、かの川」

少年の歌声は周囲に響き渡るやかましいくらいのエンジン音にかき消されてほとんど聞くことができないが、少年はそれでも歌を続けていた。

「ゆめはいまも、めぐりて」

少年の表情は実に穏やかで、嬉しそうなものだった。………それこそ、彼がこれから“死ぬ”人間であるということが信じられない程に。

「忘れがたき、ふるさととつと」

ふと、少年はそこで歌を区切り、眼下に広がる海原に目を向けた。

「そろそろ標的のアメリカ艦隊が見えてきてもいい頃合いなんだけども、………まだ見えねえか」

少年は若干の落胆を滲ませ呟いた。

「まあ焦っても仕方ないか。俺たちに課せられた任務は日本の命運を左右する重要なものだけど、焦って失敗しましたじゃ済まされないからな。それに……………」

少年はそう言って、続けて己の愛機に言葉を投げた。

「これが俺とお前の最初で最後の出撃なんだ、気長に行くのも悪くないよな。なあ『桜花』よ」

少年は己の愛機たる、人間爆弾『桜花』にそう言葉をかけた。

同時に、彼はここに至るまでの一連の経緯を思い出していた。

「貴様に一つ重要な任務を言い渡す」

きっかけは上官のその一言だった。

「重要な任務、でありますか？」

「そつだ。やるのは今まで通りの特攻となんら変わりはないが、重要度がまるで違う」

そう言って、上官が取りだしたのは一つのケースだった。

「上官殿、そちらは？」

それを尋ねると、上官の男は何重にも施された鍵を解錠しながら、不敵に笑った。

「くく……これはな、この国を救う最後の切り札だ」

言って、男は最後の鍵を外し、ケースを開けた。

「これが……この国を…日本を救う切り札、でありますか？」

中に入っていたのは、一つの赤い宝石だった。

男は少年の言葉に頷きながら、呆気に取られる少年に構わず、再び口を開いた。

「一見ただの宝石にしか見えまい？　だが、これは高エネルギーの結晶体でな、詳しい説明は省くが、この威力は先日広島や長崎に投下された鬼畜米英どもの新型爆弾以上の威力を持っているらしい」

その一言で十分だった。少年は上官の言葉に目を見開いた。

上官は尚も言葉を続ける。

「これを通常の1200kg徹甲爆弾と合わせて貴様の『桜花』に搭載し、敵艦隊の密集する海域に投下する。本当ならば、敵の首都であるワシントンに投下するのが最良のだが、生憎我が軍にはそこまで飛べる爆撃機が存在しないのでな」

男は悔しげにそう漏らしたが、少年にとってはそれでも十分過ぎるくらい喜ばしい内容だった。

彼にとってアメリカとは敵であり、周囲から忌み嫌われていた自分を認めてくれた唯一の存在を奪った憎悪の対象である。

そんなアメリカに対し、他ならぬ自分が直接手を下せるというのである。嬉しくないはずがなかった。

だが、同時に一つの不安も存在した。

「大佐殿、一つよろしいでしょうか」

「？　なんだ、言ってみろ」

「この特攻が成功した暁には、日本はアメリカに対し本格的な反抗作戦を開始するのでしょうか」

それが、胸中に蔓延る不安の内容だった。

別に反抗自体に不服があるというわけではない。アメリカは憎いし、自分を苦しめてきた国民が何人死のうと知ったことではない。

だが、日本という国が消えること、天皇陛下の御身、自分にとって大切な人の墓の安全、それらのことを考えると継戦はすべきではないと考えていた。

「どうでしょうか？」

再度問う、それに対し、男ははっきりとこう答えた。

「……………反抗作戦は行わない」

そう述べた上で、さらに言葉を続けた。

「わが軍にはもう反抗作戦を実行できるだけの戦力は残されていない。日を追うごとに国力は疲弊し、国民の間には厭戦気分が蔓延し、何より陛下自身が現状にひどく心を痛めておいでなのだ」

そう言う男の表情には、悔しさと無念さが如実に現れていた。

「連日続く特攻も継戦が目的なのではない。現実の見えない精神主義者どもはしきりに継戦を主張しているが、これはあくまで国体の護持を目的とした攻撃なのだ」

だが、それもあまり効果はなかった。と男は苦虫を噛み潰したような表情で呟いた。

「……この攻撃が成功した暁には、我が国は国体の護持を条件にアメリカの降伏勧告を受け入れる。失敗すれば……我が国は亡国の道を歩むこととなる」

そう述べた上で、男は少年に言った。

「本来貴様の出撃は8月16日だが、ともに飛ばせる『桜花』があまり無い以上、そんなことも言っていられん。……やってくれんな?」

上官たる男は最後に、そう問いかける。

胸中に蔓延っていた不安が払拭された今、少年の答えは決まっていた。

断る理由など、どこにも無い。

少年は直立不動の姿勢で声高に宣言した。

「お国のため、喜んでこの命を捧げます」と。

以上が、ここに至るまでの一連の経緯である。

「乾坤一擲、皇国の興廃この一戦にありつてやつだな。それを考えると、なんだか緊張してくるな」

緊張はする。しかし、死の恐怖は微塵も感じなかった。

（これも自分の命を軽んじてかたからかな。……つと、艦隊が見えてきたな）

眼下に目を向けると、海原の上にくつつもの艦が浮いていた。

神様の奇跡か、単にこちらの戦力を舐めていたのか、敵の迎撃機は数機しかいなかった。

「よし、行くぞー！」

答える者はいない。そうとわかっていながら、あえて叫んだ。

ダダダダダダッ！！

敵迎撃機が『桜花』を搭載した一式陸攻に機銃攻撃を加え、それと同時に、一式陸攻は『桜花』を切り離した。

(一式陸攻が……、あんたらの犠牲は絶対に無駄にしないからな！)

途端に、炎を吹いていた一式陸攻が爆散し、同時に『桜花』がジェット噴射を開始する。

敵はこれを落とそうと必死で対空砲や機銃を撃つが、既に加速しているため、命中はしなかった。

標的は艦隊中央の空母。それに向かって一直線に向かっていく。

ついには、敵空母が視界いっぱいに広がるまで接近することに成功した。

そして……

「天皇陛下っ！バンザアアイ！！」

少年が腹の底から声を張り上げると、彼の操縦する『桜花』は敵空母の甲板をぶち抜いて、内部で自爆した。

被害は直撃を受けた空母一隻留まらなかった。爆発をきっかけに発生した莫大過ぎるエネルギーは空母を飲み込み、そのまま半円状

に拡大、周囲に展開していた艦船を次々と飲み込んでいった。

この特攻攻撃により、アメリカ側は空母6、戦艦9、巡洋艦13、駆逐艦17、輸送船23を失った。

生き残った迎撃機のパイロットは後にこう語っている。

「一瞬……本当に一瞬だったんだ。敵の馬鹿爆弾（桜花）が俺たちの母艦に突っ込んだと思ったら、次の瞬間ヒロシマやナガサキなんか目じゃないくらいの爆発が起こったんだ。確認するまでもなく全滅だったよ。中には必死に生存者を探すやつもいたけど、すぐに無駄だってわかったはずだ。なんせ脱出艇どころか巻き込まれた艦の残骸すら見付からなかったんだからな」

「あの特攻兵器が何を搭載していたのかは知らないが、これだけと言える。あれは人間が下手に手をだしちゃいけないパンドラの箱なんだって。だってそうだろ？あれだけ大規模な爆発が起こったってのに津波どころか海面が全然荒れてなかったんだからな」

これを受け、GHQ（連合軍総司令部）、もといアメリカ軍並びアメリカ政府は全力で事態の隠蔽を行った。

そのすぐ後、スイスの外交官を通じ、日本から国体の護持が降伏の条件として提示された。まるで、応じなければ再び同じ攻撃を行う、とでも言うつように。

結果として、人名を重視するアメリカは、前線の被害を抑えるためこの条件に応じた（表向きは無条件降伏という形だったが）。

日本は条件が受け入れられると、この件に関する情報や記録を全て抹消、残りの“宝石”も何処かへ隠された。

こうして、日本とアメリカによる戦争は終結し、8月15日には天皇陛下によって全国民に戦争終結が伝えられた。

本当ならば、この物語はここで終わるはずだった。

だが、神の気まぐれか、悪魔の悪戯か、物語はまだ終わらない。

あの時、『桜花』とともに散った少年の物語はまだ始まったばかりなのである。

第一話「乾坤一擲、皇国の興廢この特攻にあり」（後書き）

いかがだったでしょうか。

なにぶん初心者なもので、文章が変になったり、更新が遅くなった  
りするかもしれませんが、暖かい目で見守っていただけると幸いです。

## 第二話「ちょっと異なるファーストアライト」(前書き)

今回は主人公ではなくオリキャラが登場します。

時期はタイトルからも分かるようにファーストアライトからです。

## 第二話「ちょっと異なるファーストアラート」

新暦75年5月13日

機動六課立体訓練場

「はい、せいれ〜っ！」

長い茶髪の女性が声をかけると、途端に彼女のもとに四人の少年少女たちが息を切らしながら集まってきた。

一人は、オレンジ色の髪を左右でまとめた十代半ば程の少女。

一人は、ショートヘアで青い髪をした同じく十代半ば程の少女。

一人は、ピンク色の髪で肩に一抱え程の大きさのドラゴンを乗せた十歳程の少女。

一人は、赤い髪で身の丈以上の槍を抱えた十歳程の少年。

四人とも息が切れ、若干の疲労が表情に現れていた。

だが、すぐに息を整え、グツと胸を張る。

「それじゃ、本日の早朝訓練ラスト一本…まだ頑張れる？」

「……はいつ〜!」「……」

茶髪の女性の問いに対し、集まった少年少女たちは元気よく返事

をする。

「それじゃ、シュートイベーションをやるよ。…レイジング・ハート」

「All right Axel Shooter」

次の瞬間、女性の足下に奇妙な紋様の陣が現れ、次々と桜色の球体が発生した。

その数全部で11、それらが女性の周囲を高速で飛び交っている。

「私の攻撃を五分間、被弾なしで回避できるか……私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

五分間完全回避、万全の状態ならまだしも、今の状態の彼女らではかなりの難題である。しかし……

「……はいつ……!」「……」

少年少女たちはこれに対し、元気よく返事を返した。

「おお、やってるやってる」

茶髪の女性と少年少女たちのいる地点から少し離れた廃墟ビルの

屋上、そこで一人の男が彼女らを見下ろしていた。

「しかし、テストとはいえ五分間完全回避を条件にするなんてな、なのも随分鬼畜なことをするもんだ。白い魔王の名は伊達じゃないってか」

男が呟くと、こちらに向かって桜色の光条が一本伸びてきた。

「ん？なんかこっちにディバインバスター的なものが……ってディバインバスター！？」

桜色の光条、もといディバインバスターはもうすぐそこまで迫っていた。言うまでもなく、回避は不可能である。

「ちっ、アイシクルシールド！！」

男が叫ぶと、突如目の前に氷の壁が出現し、ディバインバスターを受け止めた。

余談だが、このアイシクルシールド、理論上は隕石の直撃にも耐え得るらしいから未恐ろしいものである。

「（……………おい、なのは）」

男は茶髪の女性、高町なのはに抗議の念を込めて念話を送った。

「（あれ？恭谷君、どうしたの？）」

「（どうしたの？じゃねえだろ、いきなりディバインバスターぶっ放しやがって）」

「（んー。何か恭谷君が私の悪口を言ってたみたいだから）」

「（お前はエスパーか!?!）」

「（やっぱり言ってたの!?!）」

なのははヒドイと言わんばかりに声（念話だが）をあげる。

ちなみに、このやり取りの間もなのはは部下たちの訓練を行っていたのだから、彼女がどれだけ高いレベルの魔導師なのかうかがい知れるだろう。

「……………なんだか、新人四人が可哀想になってきたな。あちこちボロボロだし」

新人四人となのはの訓練を眺めながら、恭谷こと神倉恭谷は思わず言葉を漏らした。

彼自身もなのはがどれだけ強いのかを充分理解している。何せ彼女が魔導師成り立ての頃からの付き合いで、何より原作知識で彼女の訓練の詳細を知っているのだから。それだけに彼女の訓練がハードなものであることを誰よりも知っていた。

「まあ頑張れ、新人四人衆。俺は“原作”で結果知ってるから一足先にデバイスルームに行ってる」

誰にも聞こえないと知りつつ、恭谷はその場を後にした。

side - ティアナ

「このボロボロの状態でなのはさんの攻撃を五分間捌ききる自信、ある?」

「ないっ!」

「同じくです」

あたしが皆に問いかけると、スバルとエリオがそう答えた。

そうよね、万全の状態でも難しいのに、今の状態じゃ五分も持ちそうにない。それなら……………

「じゃ、なんとか一発入れよう!」

「はいっ!」

キャラが返事を返し、それを合図に全員がデバイスを構える。

なのはさんはハンデとして形成した11個の魔力弾以外は使わな  
いみたいね。

(それなら……………まだ勝機はあるっ!)

「よぉ〜し!行くよ、エリオ!」

「はい！スバルさん！」

スバルとエリオが同時にデバイスを構える。なのはさんはそれを見て一度だけ頷くと……………

「準備はOKみたいだね……………それじゃ、レディーゴー！」

開始の合図とともに五個のアクセル・シューターがあたしたちの方に向かってきた。

「全員、絶対回避！二分以内で決めるわよ！」

「……………おおっ！……………」

全員が返事をすると同時に素早く回避、所定の位置に着く。

最初はあたしとスバルで仕掛ける！

「っ！？」

なのはさんの背後からウィングロードが形成され、猛スピードでスバルが突撃を敢行する。

「アクセル！」

『snip shot』

再度二つのアクセル・シューターが放たれる。

でも、回避なんてしない。だってそっちは……………

「っ！」

アクセル・シューターはあたしとスバルの“幻影”に当たると、そのまま直進を続ける。幻影はシューターが当たると同時にその場で消失した。

「シルエット…………やるね、ティアナ」

なのはさんがその言葉を漏らした直後、再度なのはさんの背後にウイングロードが形成された。

「っ！？」

でも、ウイングロードの上には誰もいない。でも次の瞬間、誰もいない空間から突然スバルが現れる。

「でええりやああ！！」

スバルがリボルバーナックルを構えて、突撃してくる。

それに対し、なのはさんは素早く対応し、ラウンドシールドでスバルの拳を止める。

「く…………くうう…………」

スバルはなんとかしてシールドを抜こうと力を入れてるけど、やっぱりというかシールドはビクともしない。

とそこで、シルエットを撃ち抜いた二つのアクセルシューターが方向転換してスバルの方に襲いかかった。

「はっ」

それに気付いたスバルは咄嗟に後ろに跳んでこれを回避する。

「うん、いい反応」

でも、着地に失敗してウィングロード上でバランスを崩してしま  
う。

「スバル馬鹿！危ないでしょー！！」

なんとか持ち直したけど、一歩間違えれば地面に落下してたわよ  
！？

「あう…ゴメン！」

スバルがシューターから逃げながら謝る。

謝るのは後でいいから今は回避に集中しなさい！

（あのままじゃスバルに当たるわね。それなら）

「（待ってなさい。今撃ち落とすから）」

あたしはスバルにそう言って、アンカーガンに魔力を集中、魔力  
弾を形成する。

そして、形成が終わって引き金を引くと……

バスン……！！

「ええっ!？」

ふ、不発!？

「ああ〜!ティア、援護お!!!」

スバルが悲鳴混じりに声を上げる。

マズッ!、さっきよりシューターとの距離が縮まってる!

「この……っ!肝心な時にっ!!!」

そう言いながら、あたしはアンカーガンから不発弾を排出、新しいカートリッジに交換する。

そして、すぐさま魔力弾を発射した。

side out

S i d e - エリオ

「来たっ!!!」

スバルさんのところにティアナさんが撃った魔力弾が到達する。

同時に、スバルさんが大きく跳躍すると、ティアナさんの魔力弾がなのはさんのところに向かっていった。

なのはさんの意識はそっちに向いてる。今がチャンスだ!!!

「我が請うは、疾風の翼、若き槍騎士に、駆け抜ける力をつ!!!」

『Boost up: Acceleration!!!』

僕のデバイス、ストラダにキャロの強化魔法がかかる。凄い!  
力が湧いてくる!

そして、ストラダがジェット噴射を開始する。

「あの!かなり加速が付いちゃうから!気を付けて!」

「大丈夫っ!!!」

だって僕は.....

「スピードだけが取り柄だからっ!!!」

僕の取り柄はスピード、だからそれを生かす!!!

「行くよ！ストラーダ！」

ストラーダは答えない、代わりに、ジェット噴射が一際激しくなった。

なのはさんはティアナさんの魔力弾を避ける。さらにその上からフリードがブラスト・フレアを放つが、これも回避される。

と同時に、僕たちに気付いたなのはさんがこっちに接近してくる。

「エリオっ！今っ！」

ティアナさんが声を上げる。よし……………

「いつけえええっ！！！」

『Spear attack』

次の瞬間、ストラーダが加速し、僕はなのはさんに向かって突っ込んでいった。

「であああっ！！！」

衝突。大きな爆発が起こった。

「うわあっ！！！」

僕はあまりの衝撃に吹き飛ばされ、近くの建物に着地した。

「エリオー！」

「外した!？」

ティアナさんの言葉に若干表情が強張る。

外したか、当たったか、今はそれだけが知りたかった。

爆風が徐々に晴れていき、なのはさんの姿が現れる。そのバリアジャケットは染み一つ付いてなかった。

外した……………

そう思った直後、レイジング・ハートから予想外な言葉が聞こえてきた。

『Mission complete』

「お見事、ミッションコンプリート!」

「本当ですか!？」

ビルの縁にぶら下がっていた僕は、思わず問い返した。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いて、ジャケットまで通ったよ」

なのはさんのジャケットをよく見てみると、確かに煤みたいな汚れがついていた。

そうか、僕の攻撃、ちゃんと通ってたんだ!

「それじゃ、今朝はここまで。一旦集合しよ」

「「「「はいつー!」「」「」

返事を返して、僕たちは集合した。

side out

side - なのは

「バリアジャケットからいつもの制服に戻って、皆のところに向かう。」

「さて、皆もチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

「「「「ありがとうございます!」「」「」

皆嬉しそう、まあ当然か。

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ。指揮官訓練、受けてみる?」

「い、いや、あの……戦闘訓練だけで一杯一杯です」

「あははっ」

スバルが笑い出すと、フリードが辺りをキョロキョロと見渡していた。

「キュウ？ キュクル〜？」

「フリード、どうしたの？」

「何か…焦げ臭いような……」

確かに、下から何か焦げ臭い匂いが……

「あっ、スバル、あんたのローラー！」

「えっ？」

ふと視線を下に向けると、スバルのローラーが煙を出してショートしていた。

「あっ！？ うわっ、ヤバっ！」

スバルはローラーの異常に気付くと、すぐにそれを脱いだ。

「あっちゃ〜」

ローラーからは黒煙と火花が吹き出して、明らかにオーバーヒートしていた。

「しまった〜……無茶させちゃった〜」

そう言って、スバルはローラーブーツを抱え上げる。

「オーバーヒートかな、後でメンテナンススタッフに見てもらおう?」

「はい……」

答えるスバルの表情は若干暗い。まあずっと訓練に耐えてきたパトナーが突然壊れちゃったんだから、当然だよな。

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい?」

「はい……だましましたです」

やっぱり、さっきの不発もそれが原因かな。

二人とも確か自分でデバイス組み立てたんだっけ? それを訓練校時代からずっと使ってたのか、それじゃあ限界が来ても仕方ないよね。

どれだけメンテを重ねても、やっぱり自作品は官給品に比べて耐久度は劣るし。

うーん、もうそろそろ良い頃かな。

「皆、訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな?」

「新……?」

「デバイス……?」

皆がキョトンとした顔で、私の方を見る。ああ、そういえば、まだ話してなかったね。

「まあ、詳しいことは隊舎に戻ってから話そっか？」

「……………はいっ！」「……………」

「じゃあ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるっか？」

「……………はいっ！」「……………」

うん、皆元気だね

「あつ、あの車って……………」

ロビーに入る前に、前から黒い車が走ってきた。あの車は確か…

……………

「フェイトさん！八神部隊長！」

やっぱり、フェイトちゃんの車だ。

「すごい、これフェイト隊長の車だったんですか！？」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

あはは、皆興味津々だね。まあ気持ちは分かるけど。

「皆、練習の方はどないや？」

「あゝ、えへへ……」

「頑張ってます」

「エリオ、キャラ、ごめんね。私は二人の隊長なのに……あんまり見てあげられなくて……」

「あつ……いえ、そんな」

「大丈夫です」

「四人ともいい感じに慣れてきてるよ。いつ出勤があっても大丈夫！」

本当、皆よく頑張ってくれてるし、この調子なら実戦でも充分対応できると思うな。

「そうかあ……それは頼もしいなあ」

はやてちゃん言葉で、四人とも嬉しそうな表情になった。

「二人はどこかにお出かけ？」

「うん、ちょっと六番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから……お昼は皆で一緒に食べよっか？」

「「「はいつ!」「」」

皆が元気よく返事をする。とそこで私はあることに気付いた。

「あれ? そういえば恭谷君は一緒じゃないの?」

確か今日は聖王教会の方に用事があるようなこと言ってたはずだけど……

私が二人に尋ねると、何故かはやてちゃんは顔をひきつらせて、フェイトちゃんはピクツと僅かに身動きした。

「な、なのはちゃん? 今その話題は「恭谷? 知らないよ? ウフフ

「あゝ遅かった……」

あ、あれ? なんだかフェイトちゃんの様子が……

「ウフフ……恭谷ったら本当にもう……ウフフフフ」

「フェ、フェイトちゃん?」

フェイトちゃん、笑ってるだけなのにどうしてそんなにドス黒いオーラを撒き散らしてるの? どうしてそんなに力一杯ハンドルを握りしめてるの?

「……そろそろ行かないと。あつなのは、恭谷に会ったら伝えておいて……帰ったらアリシアと一緒に O H A N A S I だよって」

フェイトちゃん、前髪で表情は見えないけど、笑ってるんだよね

「でも殺気みたいなもの放出するのはよくないと思うな。ほら、エリオとキャロが怯えてるよ。私もちよつと恐くなってきたし。」

「……………なのは何？」

「は、はい!！」

「……………お願いね？」

「う、うん!。分かったよ!」

「ありがとう。じゃあ、私たちはこれで」

「ほ、ほな、行ってくるな」

そして、車が発進して、私たちは全員敬礼で見送った。

（ ）（ ）（ ）（恭谷君何やらかしたんだろ）（ ）（ ）（ ）

side - 神倉恭谷

「ぶえつくしよん!！」

デバイスメンテナンスルームに俺のくしゃみが盛大に響き渡る。

「だ、大丈夫ですか？」

俺が一際デカイくしゃみをぶつ放すと、隣で作業をしていたシャーリーが声をかけてきた。

「大丈夫だ、問題ない」

俺が某ゲームの名台詞風に返すと、シャーリーは作業の手を休めることなく、再度口を開いた。

「でもスゴイくしゃみでしたよ？風邪じゃないんですか？」

「違うな、大方誰かが俺の噂でもしてるんだろ」

「フェイトさん、とか？」

「……………やめてくんない？マジで笑えねえよ」

確かに可能性としては充分あり得るが……………

それも全てさっきのアレが原因だろう。

「クソ、フェイトのやつ。ちょっと職員の女の子とお茶したくらいでザンバー繰り出しやがって」

「でも、考え方によっては自業自得じゃないですか」

「どこが！？お茶ただけでそれ以上は何もないんですよ！？」

「でも恭谷さん、とても楽しそうでしたからねえ」

「だとしてもだ。普通はまず平和的に話合つべきだろ。なのにあいつは即効で暴力に訴えてきたんだぞ？あの執務官殿は」

「私に言われましても……………」

そんな感じで、シャーリーと話を続けていると、なのはたちが入ってきた。

「失礼します。つてあれ？恭谷君？」

「おう、そっちはもう訓練終わったのか」

「うん、それでこの子たちの新しいデバイスをね」

「あゝなるほど」

見れば新人たちは自分たちの新しいデバイスを前に、目を輝かせていた。

「わゝこれが」

「あたしたちの…新デバイス…ですか？」

スバルとティアナが呟き、シャーリーが自信満々でそれに答える

「そうです。設計主任あたし。協力、恭谷さん、なのはさん、フイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「はあ……………」

ふむ、今イチピンとこないって感じだな。チビっ子二人はっと。

「ストラーダとケリユケイオンは変化無しか」

「うん、そうなのかな？」

「違う違う、変化が無いのは外見だけで、中身はちゃんとパワーアップしてるよ」

「「恭谷さん！」」

「おう」

俺が返事を返すと、今度はリインが解説を始めた。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触に慣れてもらう為に基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ……あれで最低限!？」

「本当に？」

二人とも信じられないといった感じだ。まあようやくと使いこなせるようになったデバイスが実は最低限の機能しか積んでませんでしたってんだから、そりゃ驚くわな。

「皆が扱うことになる四機は六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粹を集めて完成させた最新型！」

そこまで説明したところでリインはティアナ、スバル、エリオ、キヤロの中心に飛んだ。

「部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキヤロ、スバルにティア、個性合わせて造られた文句無しに最高の機体です」

そして、リイン四機のデバイスを近くに引き寄せる。

「この子たちは皆まだ生まれたばかりですが、いろんな人の願いや思いが込められていっぱい時間掛けてやっと完成したです」

そこで、リインは手元のデバイスを四人の前に移動させた。

「ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界までおもいつきり全開で使ってあげてほしいです」

「だな、こいつらだってそれを望んでるだろうし」

もつとも、後半になれば全力全開どころか全力全壊までいかなきゃならなくなるんだけどな。

「はい！じゃあこれから皆のデバイスの機能説明を始めますね！」

シャーリーの掛け声で、説明会が始まる。

まず何段階かに分けてリミッターがかけられていること、各自が現時点での出力を扱いきれるようになったら順番に解除していくことが伝えられた。

「あっ出力リミッターっていうのはさんたちにもかかっています

よね？」

「ああ、私たちはデバイスだけじゃなくて本人にもだけどね」

「……ええっ!？」

「……おーおー驚いてる驚いてる。」

まあちよつと考えれば分かることなんだけどね。隊長陣はオーバースとニアスが大集合、これで戦力保有に引つ掛からないわけがない。

はやては4ランクダウン、なのはとフェイトは2・5ランクダウン、シグナムたち副隊長陣が2ランクダウンである。つてかこんな裏技あるんなら戦力保有制限の意味なくね？

「私はもともとS+だったから、2・5ランクダウンでAA。だからもうすぐ一人で皆の相手をするのは辛くなってくるかな」

またまたこの魔王様は、絶対にまだまだいけるだろ。でなきや管理局の白い悪魔なんて呼ばれるはずがない。

「（恭谷く〜ん？また何か失礼なこと考えてない）」

「（……………人の心を読まんといってください）」

「（やっぱり考えてたの!?)」

「（イエスカノーで答えるなら、バリバリエスだな）」

「（……今度はSLBをお見舞いしてあげるよ）」

「（やってみろ、跳ね返してやる）」

「（………今度フェイトちゃんにないことないこと吹き込んであげるよ）」

「（スイヤセンでしたー！！自分調子くれてましたー！！）」

マジやめて！ただでさえザンバーの一件で怖い思いしてんのに、この上に爆弾投下しないで！！

何？あまりにも情けない？言ってる。とにかくフェイトがヤンデレになることだけはなんとしても避けなきゃならないんだよ。

（クソ、なのはのやつちょこざいな技覚えやがって）

とまあ、水面下でそんなやり取りが行われていたのは内緒である。

「あっ、スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能も上手く設定できてるからね」

「本当ですか！？」

「持ち運びが楽になるように収納と瞬間装着の機能もつけておいた」

「うわぁ〜、ありがとうございますー！！」

スバルのやつはしゃいでんぞ。まあ無理もないか。

つと、そろそろ警報が鳴る頃「ビービービー」鳴ったな。

警報が鳴るとともに、各モニター全てに「ALERT」の文字が表示される。

「い、このアラートって」

「一級警戒体制!？」

「グリフィス君!」

なのはが呼ぶと、モニターの一つにグリフィス准尉の姿が映る。

「はい!教会本部から出動要請です」

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、こちら、はやて!」

「状況は!？」

全員が緊張した顔ではやての映るモニターを注視する。

俺はというと、既に原作の方で内容を知っているため、真面目に聴くふりして聞き流していた。

「教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった」

はやての言葉に、皆の表情が若干強張った。

「場所はエイリモ山岳丘陵地区、対象は山岳リニアールで移動中」

「移動中って……」

「まさか……」

なのはとフェイトが言葉を洩らす。それに対し、はやては苦い表情で答えた。

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール内のガジェットは最低でも30体、大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん」

何度聞いてもハードな内容だな。新人たちの初出勤には荷が重いつつーの。

「いきなりハードな出勤や。恭谷君、なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか？」

「私はいつでも」

「私も！」

「バッチこい」

はやてはまず俺たちの返事を聞いてから、新人たちの方に目を向けた。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、皆もオーケーか？」

「……はいつ……」



オマケ

「あつ、恭谷君」

「なんだ？」

「忘れてたけど、聖王教会に行く用事があったんじゃないの？」

「何言ってるの？とっくに終わってるよ。ってか終わってからこっち来たんだよ。」

「あつ、そうなんだ」

「てっきりフェイトちゃんたちと一緒に行くのかと思ってた。」

「……………悪い、今フェイトの話はしないでくれ。トラウマが蘇る」

「やっぱり何かあったんだ。そのフェイトちゃんから伝言頼まれてるんだけど」

「……………とりあえず言ってみ？」

「帰ったらアリシアと一緒にOHANASIだって」

「いあああああ……！」

## 第二話「ちよつと異なるファーストアライト」(後書き)

次回は主人公とオリキャラの設定を紹介します。

### 第三話「主人公&オリキャラ設定」(前書き)

主人公とオリキャラの設定です。

初心者故に文が変になっているところがあるかもしれませんが、  
温かい目で見守って頂けると幸いです。

### 第三話「主人公&オリキャラ設定」

〔主人公〕

・名前……………佐上さがみひろと広人

・歳……………17歳

・性別……………男

・所属……………大日本帝国海軍 桜花特別攻撃部隊

・階級……………三等兵曹（二階級特進で後に一等兵曹）

・身長……………172cm

・体重……………62kg

・性格……………表面は真面目で、ユーモアが分かる。内面は精神的にかなり壊れてる。

・術式……………ミッド式、近代ベルカ式、

・容姿……………悪くはなく、かといってイケメンというわけでもない（せいぜい中の上と上の下の間くらい）。

・髪の色……………黒

・目の色……………金

・魔力色……………桜色（なのはよりも濃い。なのはが昼の桜色なら、  
広人は夜桜色）

・魔力ランク……………AAA

・魔導師ランク……………空戦A-

・魔力変換資質……………風

・稀少技能<sup>レアスキル</sup>……………魔眼（種別や魔力ランク問わず、幻術系一切無効化）

・趣味……………釣り、読書（活字本）、槍術、

・特技……………特になし

・好きな物……………桜、日本、天皇陛下（忠誠の対象）、自分を認め  
てくれる人、

・嫌いな物……………精神主義者、アメリカ、自分の目、日本国民、

・苦手……………槍術、

本作の主人公。世界で唯一量産された特攻兵器『桜花』のパイロットで、米艦隊殲滅の際の爆発によってミッドチルダに飛ばされてしまっ  
た。

基本的に明るく仲間思いだが、どこか精神的にかなり病んでおり、  
戦場で死ぬことに執着しているためか自分の命を軽く見ることが多  
く見られる。

生まれつき両目が金色で、そのこととずつと周囲から迫害され、拳げ句は両親からも迫害されるようになった。そのために根本のところでは人を信用していない節がある。

ミッドチルダに飛ばされる前は知るよしもなかったが、彼の両目レアスキルは特殊技能で、色が異なるのはその副作用。

## 〔魔法〕

### ファントム・シューター

誘導型の射撃魔法。射出時に幻術系の魔法をかけ、一定時間周囲から見えないようにする。

相手に気付かれずに接近する様はまさしくファントム（幽霊）そのものだが、一度に生成できる数が少なく、また通常のシューターに比べて速度も劣る。

### インヴィジブル・ダガー

ダガータイプの魔力弾を音速の速度で撃ち出す。

強力だが、音速故にほとんど直進しかできず、発動までにかかる計算が膨大で時間がかかるため、連続使用はもちろん、多弾使用も事実上不可能。

それに加え、音速故に生じる衝撃波が凄まじいため、衝撃波減衰魔法をかけるか、被害を気にしなくていいところではしか使用ができない。

### レイン・バレット

広範囲殲滅形態専用の魔法。高濃度の魔力弾を射出、それを空中で起爆させ、数千もの魔力弾子を降り注がせる。もとが高濃度の魔力弾なため、魔力弾子一つ分の威力はシューター一発分の威力とほぼ同じ。

下手すればSLB以上に厄介な魔法だが、消費する魔力が桁違いに高く、使用にはカートリッジ五発を必要とする。

また、高濃度魔力弾をそのままぶつけることも可能。

#### 疾風一閃

槍形態専用。槍に風を纏わせ、文字通り疾風の如き速度で突き、あるいは斬撃を繰り出す。

単純だが、それ故に威力が高く、また強力なバリア破壊能力が付与されている。

#### 絶槍乱舞

高濃度魔力で形成した6本の槍を高速で操る。使用用途は様々で、槍本体の爆破も可能。

#### 〔デバイス〕

・名前……………桜花

・規格……………インテリジェントデバイス

・人格……………女性型

・形状……待機状態：赤い矢尻。起動状態：レイジングハートと同じ（ただし配色が異なるのと、一部レイジングハートにはない機能が備わっている）

#### 壱型《杖形態》

なのはのレイジングハート・エクセリオンと同様の形状をしているが、レイジングハートが金と白の配色なのに対し、桜花は銀と白の配色。

射撃戦に優れ、主にセンターでの戦闘に適している。

#### 弐型《砲形態》

主に砲撃戦を主眼に置いた形態。形状はレイジングハートのバスターモードとだいたい同じ。

大振りな攻撃が多いぶん威力が高い形態だが、小回りがきかず、魔力集束の腕が上がるまではあまり多用はできない。

ピットを併用して使用することが可能だが、慣れなければ無用の長物。

#### 参型《槍形態》

射撃、砲撃メインの本デバイスで唯一の接近戦形態。

起動中もシューターくらいなら使えるが、それ以外は制御甘くなつて使えない。

また、柄の部分と先端部分が分離できる仕様になっており、柄と先端は内蔵されたワイヤーで繋がっている。

形状はレイジングハートの先端を武装錬金のサンライトハート改の先端の形にしたような感じ。

#### 四型《殲滅形態／広範囲殲滅形態》

本デバイスでもっとも威力の高い形態。基本形状はストライクウイッチーズのフリーガーハマーそのもの。

基本機能は殲滅戦闘オンリーなので、犯人逮捕、および市街地や味方が入り乱れている戦闘では使用がかなり制限される。カートリッジ四発消費。

名前からも分かるように、搭乗していた桜花がデバイス化したものの。

基本的には主に対して忠実で、広人のことを相棒と呼び慕っている。

形状がレイジングハートと似通っているのは、桜花がデバイスとして覚醒した際、近場で戦闘を行っていた魔導師の中で一番広人に似た戦闘スタイルの魔導師のデバイスをコピーしたため。

そのため、レイジングハートとほとんど同じモードや魔法の使用が可能となっており、性能面ではもはや姉妹機と言っても過言ではないものになっている。

また他のデバイスにはない自爆機能を搭載しており、その威力は通常の1200kg徹甲爆弾と同程度。

〔オリキャラ〕

- ・名前……………かみくらきょうや神倉恭谷
- ・歳……………19歳
- ・性別……………男
- ・所属……………時空管理局特務部隊
- ・階級……………一等空佐（特務部隊隊長）
- ・身長……………177cm
- ・体重……………68kg
- ・性格……………比較的温厚、ユーモアが分かる、
- ・術式……………ミッド式、近代ベルカ、一部古代ベルカ、
- ・容姿……………かなりイケメン
- ・髪の色……………銀
- ・目の色……………翠
- ・魔力色……………蒼
- ・魔力ランク……………測定不能

- ・魔導師ランク……………総合SSS
- ・魔力変換資質……………氷結、炎熱、電気、風、
- ・特殊技能？……………チート能力<sup>レアスキル</sup>
- ・趣味……………ゲーム全般、読書（ライトノベル限定）、機械いじり、ツィリング、

- ・特技……………魔改造

- ・好きな物……………ゲーム全般、バイク、仲間、

- ・嫌いな物……………上層部の連中、仲間を侮辱する奴、

- ・苦手……………書類仕事、早起き、

もとは現実世界の住人だったが、トラックに跳ねられて死亡。その後、自称神にチート能力付随で蘇らせてもらった。

なのは世界は無印から介入しており、神様からももらったチート能力でアリシアを蘇生、プレシアの病気も直した。また闇の書偏でもリインフォースを生存させた。

管理局では異常なまでのスペックと「プレシア・テストロツサ事件」や「闇の書事件」といった管理局史上類を見ない大規模事件を解決に導いた功績から、異例の早さで出世を繰り返し、今や局内で知らない者はいない程の有名人となった。

実は機動六課の設立にも大きく関わっており、事実上局内で彼や機動六課に文句を言える者はほとんどいない。

魔法は基本オ리지ナル中心だが、その気になればありとあらゆる

アニメのチート能力を発動可能。

階級は一等空佐だが、本来は提督クラスにまで昇級してもおかしくない程の成果を挙げている。だが、本人に提督になる気がないので何度も断り続けている。最近では三提督が彼を提督にしようと暗躍を始めた。

現在はフェイトと交際しており、なぜだかアリシアまでそれにくつついてきた。そのために、恭谷自身にはこれ以上フラグを立てるつもりはないのだが、一般職員やヒロインたちにフラグが立つことがあり、その度にフェイトとアリシアにボコられる。要は彼女いるのにフラグ立てまくってるクソヤ…ゲフンゲフン。

## 〔魔法〕

### アイシクルシールド

空気中の水分を凝固させ、氷の壁（正確には盾）を形成する。魔力による強化が施されており、その強度は折り紙つき、試したことはないが隕石の直撃なみの衝撃にも耐え得る。

### フリーズランサー

空気中の水分を凝固させて大量の氷柱を生成、それを弾丸がごとき勢いで飛ばし続ける。

単純だが、高速で打ち出される膨大な数の氷柱は回避も迎撃も難しく、防ごうにも氷柱一本一本にシールド破壊の効果（非殺傷設定）が付与されているため、だいたいの場合は出されたら終わる。

グラビトン・ブレイク

一点に重力子を集中させ、起爆させる。

本来なら媒体となるアルミニウムが必要となるが、恭谷はそれを使わずに起爆させることが可能。しかし、乱発はできず、使用後は一分のインターバルが必要。距離は無制限。

業火一閃

剣に炎を纏わせ、斬撃を放つ攻撃。

爆発を起こすこともでき、その威力は対象を一撃で粉碎するほど。

〔デバイス〕

・名前……………ナイトハート

・規格……………インテリジェントデバイス

・人格……………男性型

・形状……………待機状態：蒼色の宝石が埋め込まれた銀の指輪。起動状態：両刃の西洋剣（モンハンのロイヤルソードと同じ）

ノーマルモード

第一形態

接近戦に主眼を置いた形態。そこそこの重量があるため、その威力は侮れない。

形状はモンハンのロイヤルソード。

## ブラスターモード 第二形態

砲撃戦専用の形態。一発あたりの威力が非常に高いが、魔力消費が激しい（ただし恭谷には一切関係ない）。  
形状はモンハンのデルフダオラ

## バスターモード 第三形態

接近戦専用。ノーマルモードよりも重量があり、その分威力も高い。そのため、主にノーマルで対処がしづらい相手に用いることが多い。

本来ならあまりの重量に動きが鈍るところかまともに扱うことができないが、恭谷には関係ない。  
形状はモンハンのアイアンソード。

## アサルトモード 第四形態

攻撃特化型形態。防御は一切行わず、ただひたすら攻め続ける。形状はモンハンの封龍剣“超絶一門”。

恭谷が自作したデバイス。恭谷のことをマスターと呼んでいる。  
名前の由来は、騎士のように忠誠心が強く、クソ真面目な性格だから。

ありとあらゆる戦闘に対応できる高性能デバイスで、それ故に扱いも難しいが恭谷は簡単に使いこなしている。

### 第三話「主人公&オリキャラ設定」(後書き)

次回はいよいよ本編、並びに主人公と六課陣営の邂逅です。

できるだけ早く投稿できるように頑張ります。

設定は本編で新しい技がでたら更新する予定です。

#### 第四話「目が覚めたら、そこは異世界だった」(前書き)

まず始めにお詫びしなければなりません。

前回の後書きでは、主人公と六課の邂逅を書くと言っていたのですが、主人公とデバイスの初対面で予想以上にページを使ってしまう、ページ数がやたらと多くなってしまったため次回に回すことにしました。本当に申し訳ありません。

続きはなるべく早く投稿したいと思います。

#### 第四話「目が覚めたら、そこは異世界だった」

新暦75年5月13日

エイリモ山岳地帯

午後というには少し早い時間、大量の樹木が林立する森の中で、佐上広人は立ち尽くしていた。

「こっつて……どこなんだ？」

答える者などどこにもいない、そうと知りつつ広人は咳かすにはいられなかった。

(黄泉の国……って感じじゃないよな、かといって靖国ってわけでもなさそうだし)

自分の操縦する桜花が敵空母の甲板を貫通したのは覚えている。それ以降の記憶は皆無だが、おそらくは着弾と同時に死んだはずだ。

「……………それが、どうしてこんな得体の知れない森の中にいるんだ？」

生き残った、という可能性はあり得ない。特攻兵器で敵に突っ込んだ拳げ句、ゼロ距離での大規模爆発である。生き残れる道理などあるわけではない。

だが、現に自分はこうして二本の足で立って呼吸している。目が覚めたら見たことのない森の中というのが引っ掛かるところではあるが。

(いつそこが死後の世界だっていうなら納得もできるんだが、どう見ても違うよな……………)

「……………本当にどこなんだよ」

『管理世界ミッドチルダ、エイリモ山岳地帯です』

「そりゃどうもご親切……………に？」

突然、どこから女性の声が聞こえ、広人は周囲を見渡した。

(誰だ？どこにいる？)

警戒心を剥き出しにして周辺一帯に目を向ける。だが、どれだけ周囲を見ても、人陰らしき姿は見当たらない。

『どこに目を向けているのですか、私はここですよ』

もう一度同じ声が聞こえ、今度こそ声のした方向、自分の“胸元”に目を向けた。

「……………なんだコレ？」

見ると、紐で通された赤い鎌状の宝石が、首から下げる形でぶら下がっていた。

(これが声の正体か？)

広人は宝石を首から外し、目の高さまで持っていく。

「……………どこからどう見ても、ただの石だよなあ……………」

宝石を見つめながら、広人は呟いた。

常識的に考えて、石が言葉を解すはずがない。ましてやこの赤い宝石など綺麗なだけで、あまり変わった点は見受けられなかった。

しかし、広人が呟いたとたんに宝石が点滅し、それに合わせて声が発せられた。

『ただの石とは随分な物言いですね、相棒。私は悲しいですよ』

「やっぱり喋った!？」

思わず大声で叫び、広人は手にしていた宝石を茂みに投げるべく、腕を振り上げる。

『ちよつ!?! 相棒! 投げないでください!!』

宝石がそう言葉を発するが、今の広人にはそれに対応できるだけの余裕はなかった。

何せただの宝石だと思われていた石が、突然言葉を発したのである。驚かないわけがない。

そのため、宝石は綺麗な放物線を描いて茂みの中に落ちた。

(なんなんだ!?! 一体何が起こってるんだ!?!)

そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

目が覚めたら海ではなく森の中、身に覚えのない赤い鏃状の宝石が首にかけてあり、極めつけはその宝石が突然話しかけてくる時きた。広人に見れば予想外もいいところである。

(落ち着け、とりあえず落ち着くんた)

混乱の海に溺れそうになっていた思考を半ば無理やり引っ張りあげ、とりあえず気分を落ち着かせるべく深呼吸を繰り返す。

そして、ある程度気分が落ち着くと、状況整理を開始する。

(まずはなんで俺がこんな森の中にいるのかって話だが……………駄目だ、全然分からん。ここが海の近くだっていうなら無理矢理でもまだ説明がつくんたが……………そうでもなさそうだしな)

『……………相棒。驚かせてしまったことは謝罪します。ですからそろそろ拾ってください』

(ええい、このことは後でじっくり考えるところとして次の問題だ。乗ってた桜花はどこにいった？ あんな直進くらいしかできない重量物がそんな簡単に隠せるとは思えんけども……………ってちよつと待てや)

そこまで考えたところで、広人はあることに気付き、青ざめた。

『相棒！ 私は深く反省しました！ ですから拾ってくださいってば……………』

茂みの中から宝石と思しき女性の声が聞こえてくるが、今の広人にしてみればそれどころではない。

(俺がここにいて、こうして生きてるってことは……………)

『状況が飲み込めずに混乱してるんですね!? 分かりますよ! ですが安心して下さい! 拾って頂けたら懇切丁寧に現状を説明して差し上げます!!! ですから早く拾って…うわっ!? 虫が! 虫がきた! 相棒! 早く拾ってください!!!』

再度茂みの中から宝石の音が聞こえてくる。若干声に切実な感じが混ざっていたが、例によって聞き流している。

(俺が…………俺が…………こうして生きてるってことは…………!!)

そこまで考え、広人は頭を抱えて絶叫した。

「攻撃が…………攻撃が失敗したあああっ!!!」

『聞けやあっ!!! なにさっきから無視してるんですか!? 終いには自爆して周辺一帯を焼きますよ!!!?』

そこでようやく広人が絶望的思考から現実引き戻され、先程宝石を投げ入れた茂みに目を向けた。

「自爆!? やめてくれ、まだ攻撃が成功したかどうかもわかってないってのに!!!」

『だから拾ってくれたらそれも含めて説明しますと言っているでしょ! お願いですから私の話を聞いてください!!!』

宝石の声はもう既に切実さを通り越して泣きそうになっていた。

(……………できればあまり関わりたくないんだけども……………仕方ない、自爆もされても困るしな)

そんなことを考えながら、広人は先程宝石を投げ入れた茂みへ向かい、止まっていた虫を払って宝石を拾い上げた。

「言われた通り拾ったが？」

『まったく、拾うのが遅過ぎます。私虫って苦手なんですよ』

「そんなこと俺は知らん。ってかそんなことよりも、一体何がどうなってるのかを教えてください」

『……………相棒が冷たすぎる件について』

「おい、人の話を聞けって言ったのはお前だろう、無視すんな。ってかさつきからずっと言ってるが相棒ってどうゆうことだ？俺はお前のことなんか知らないぞ？」

『……………まさか、あなたは私のことを覚えていないと仰るのですか？』

広人が訝しげに尋ねると、宝石は信じられないと言わんばかりの口調で返事を返してきた。

それに対し、広人は宝石の予想外の反応に戸惑いつつも、きっぱりと断言する。

「いや、だからそう言ってるじゃん」

『そ……そんな………』

途端、宝石の口調がひどく弱々しいものになった。

『ひ……酷いです。酷すぎます。確かに姿が変わってすぐにはわからないだろうとは思っていましたが、全く微塵も覚えていないなんて………』

「いや、あの…さすがにそこまでは言っていないんだが？」

『でも覚えてないんですよね？』

「まあ………そうなるな………」

『やっぱり相棒は薄情者です！』

宝石が叫び、広人はさらに困惑する。

(ここまで言うってことはどこかで会ってるはずなんだよなあ………どこで会ったんだ？ 一度でも見たんなら忘れるはずないと思うんだが)

必死で記憶に探りを入れてみるが、あいにくどれだけ探ってみてもこの宝石と出会った記憶などない。

(なんだか、ここまでくると申し訳なくなってくるなあ………)

何やらブツブツと呟き続けている宝石を見ながら、広人はそんなことを考えていた。

正直な話、広人はこの宝石に対して、申し訳なさすら感じ始めていた。まあこんな反応をされれば誰でもそんな気分になるだろうが。

(……………駄目だ。何度記憶を探ってみても全然わからん。ってかそもそも喋る石なんて、そんなもん日本にあったか?)

正直もうお手上げである。これ以上記憶を探ったところで時間の無駄でしかないだろう。

(となると……………直接聞いてみるしかなさそうだな)

そこまで考えたところで、宝石が再度広人に問いかけてきた。

『相棒、思い出しましたか?』

宝石が責めるように言葉を発するが、広人はごまかしは得策でないと判断し、正直に答えた。

『いや、スマンが全然記憶にない……………』

言った途端、宝石が沈黙する。

再び声を発した時には、先程とは打って変わった悲しげなトーンになっていた。

『……………相棒、いくらなんでも薄情過ぎやしませんか?』

「そうは思うんだが……………、本当に申し訳ない」

『格納庫にいた時や最初で最後の出撃の道中では物言わぬ鉄塊に過ぎなかった私に向かって、しきりに話しかけてくれたのに……いざ口が聞けるようになったらこれですか？』

宝石がそう言つと、そこで広人はあることに気付いた。

(ん？ 格納庫？ 最初で最後の出撃？ まさかこいつって……)

そんなはずはない。そう思いつつ、広人は恐る恐るその名を口にした。

「お前……桜花、なのか？」

『……ようやく気付きましたか。気付くのが遅すぎますよ、相棒』

広人の問いかけに対し、宝石、もとい『桜花』は若干の呆れを含ませて、そう答えた。

「……………え？」

『ですから、私はあなたの搭乗していた桜花に意思が宿ったものなんですよ』

「……………」

言葉を失った。

自分が五体満足の状態で生きていることに関しても結構な衝撃があったが、これはそれを軽く凌駕する程の衝撃である。

自分がこうして生きているのだから『桜花』も健在だろうとは思っていた。だが、まさかこのような形で再会することになるうとは、予想の斜め上どころか完全にそれらの範疇を越えている。

「……………」

『そこまで驚くことですか？ 少し考えれば誰でも「…るか」相棒？』

桜花が訝しげに尋ねると、広人は全力で叫んだ。

「わかるかあああつ！！」

叫んだ瞬間、広人の中で何かが切れた。

「何がちよつと考えればわかるだ。そんな面影ゼロの状態でわかるわけねえだろうが！」

『そんな！ あなたは私のパイロットでしょう！？ ならわかって当選でしょう！』

「どんな理屈だ！ 確かに俺はお前のパイロットだよ。けどな、だからって総重量数トンの爆弾が宝石に変わるなんて想像できるか！」

『私への愛が深ければ多少姿形が変わったってすぐに見抜けたはずですー！』

「ねえよ！ 爆弾が宝石に変わるってどんな錬金術だよ！ それと今この場で愛とかは一切関係ない！」

『いいえ、あります！ あなたが見抜けなかったのは私への愛情が足りなかったからです！』

「どんな精神論だ！ 寝言は寝て言え！」

そんな不毛とも言つべき言い争いがしばらく続いた。

だが、それは唐突に終わりを告げることとなる。

『そもそもあなたは…っ！ 相棒！』

「？ どうした？」

桜花の様子が先程とは異なり、切羽詰まったものになる。それを見て、広人も自然と口をつぐんだ。

『4時方向より熱源多数！ 攻撃、きます！』

「っ！？」

桜花の報告にぎょっとしつつ、広人はほぼ反射的に真横にとんだ。

すると、ついさっきまで彼が立っていた場所に、白煙を尾に引いた“何か”が叩き込まれ、爆発が起こった。

「なあっ！？」

広人は爆風に吹き飛ばされつつも、受け身をとって即座に起き上がる。

そして、ふと頭上を見上げると、空に数体のカプセル型の機械が浮かんでいた。

「おい！ あれはなんなんだ！？」

『わかりません。ですがどう考えてもお友達という雰囲気ではなさそうですよ』

桜花がそう答えた直後、カプセル型の機械、通称ガジェットは広人の姿を確認すると、再び同型の物体を射出した。

「噴進弾！？ ロケットか！」

『いいえ、あれはそんな生易しいものではありません！ あれはロケットに誘導機能を搭載したミサイルというものです！』

桜花が言うと、広人は顔を引き攣らせた。

戦時中だったこともあり、広人は米軍のロケット兵器を目撃したことがあった。もちろん、それがもたらす破壊力もだ。

（おいおい冗談じゃないぞ。ロケットだけでも厄介だったのに、今度はそこに追尾してくる機能まで付け加えたのかよ）

考えながら、広人はミサイルから逃れるべく、木々が乱立する林の中へと飛び込んだ。

瞬間、広人に狙いを定めていた数本のミサイルは、木々に阻まれて爆発した。

「うおおっ!?!」

爆風によって体制を崩すが、どうにか持ち直して再び林の中を走り抜ける。

(まずいな、連中だって何もミサイルとかゆうものしか装備してないわけじゃないだろう。ここならアレの使用も制限できるだろうが、もし他の武装に機銃とかそういう小回りのきく類のものがあつたら……駄目だ。まず間違いないく殺される)

頭では冷静に思考しつつ、身体はガジェットから少しでも遠く離れるべく木々を避けながら全力疾走を続ける。

別に今更命が惜しくなつたわけではないが、桜花から特攻作戦の成否を聞くまでは死ねない。

もつとも、こんなわけのわからない連中に殺されるのは勘弁願いたいという思いもあるにはあるが。

『相棒！ 前方に熱源多数出現！ 直ちに停止してください！』

「挟撃されたっ!?!」

思わず叫び、ほとんど反射的に急停止を行う。すると、すぐ目の前をガジェットの放った青色の光弾が掠めていった。

(もし桜花が知らせてくれなかったら、今頃俺の頭に真っ赤な花が

咲いてたな……………)

そう考えると、背筋を冷たい汗が流れた。

「桜花……すまない、助かった」

『どういたしまして、ご無事でなによりです』

広人は短く礼を述べると、慌てて近くの木に身を潜ませた。

(ここなら、たぶん狙い撃たれることもないだろ)

辺りの様子に気を配りながら、いったん一息つく。だが、根本的な問題が解決したわけではない。

『……………まずいですね』

桜花が苦々しげに言う。

『周囲を全て包囲されています。ここに隠れている間は攻撃は当たらないでしょうが、それだって時間の問題です。完全に袋のネズミ状態ですよ』

「だな、相手が人間なら隙をついて逃げる、最悪殺すって手段もあるが、機械が相手じゃそう簡単にはいかないだろうし」

はつきり言ってどん詰まりである。

(どうするかな、出ていったところで話を聞いてくれそうな雰囲気じゃないし、かといってむざむざ殺されるのもなあ、それじゃあ犬

死にだ)

戦って殺されるのならまだいい、だが、犬死にだけはごめんだ。

「……………なあ桜花」

『なんででしょうか？ 相棒』

ガジェットに見つからないように、声を潜めて桜花に問い掛ける。

「この状況、どうすれば生き残れると思う？」

広人が問うと、桜花はしばし沈黙した。時間にしておよそ数秒、その後に発した声は若干の驚きを含んでいた。

『……………意外ですね』

「ん？ 何がだ？」

『いえ、相棒は迷うことなく死ぬ道を選ぶかと思ってましたので』

桜花の言葉に、広人は顔をしかめた。

「……………何故そうなる」

『事実でしょう。毎日私に陰鬱な愚痴ばかり溢していた人が何を今更』

そう言う桜花の口調はどこか刺々しかった。どうやら随分と鬱憤が溜まっていたらしい。

(いや、そこまで言われるほど毎日は………言ってたな。むしろ反論の余地がないくらいだ………)

今までを軽く振り返ってみる。なるほど、心当たりには事欠かない。

「……確かに、お前の言う通りだな」

『でしようね。まあ既に過ぎたこと、この際そんなことはどうでもいいです。……それよりも相棒』

そこまで言ったところで、桜花の声音が真剣味を帯びたものになる。

『あなたは先程、どうすればこの状況を打開できるのかと私に問いましたね?』

「?ああ、確かにそう言った」

何かいい案でもあるのだろうか。そんなことを考えながら桜花に返事を返す。

だが、それに対して桜花から発せられた言葉は全く別の内容のものであった。

『あなたは現状から脱することを望んでいる。それはあなたに生きたいという意思がある、という解釈でよろしいですか?』

それはどこか重みのある言葉だった。

半端な解答は許さない。そんな圧力がありありと現れる程に。

「……………」

桜花の問いに、広人は言葉をつまらせる。

少し前の彼ならば、間違いなく死ぬ道を選んでいただろう。

彼は軍人であり、特攻隊員である。そして特攻隊員とは御国や天皇陛下を守る為に命を捧げる - 戦って死ぬ - のが使命だ。

それ故、既に特攻の任務に着いた自分は、他の英霊たちがそうしたように男らしく潔く死ぬべきだと思っていた。

そうでなければ、散っていった英霊たちに対して顔向けができない、と。

常人にしてみれば理屈も何もあつたものじゃない無茶苦茶な考えだが、少なくとも広人はそう考えていたし、彼の生きた時代ではそれが当然だという風潮が強かった。

だからこそ特攻に従事したわけだが、後悔はしていなかった。

彼にとっては御国や天皇陛下のために死ぬること、明日の平和への礎となれることは何よりの誇りなのだから。

(……………いや、違う、それだけじゃない。俺はそんな御大層な人間じゃない)

確かに、祖国を、天皇陛下を守りたいという思いに嘘偽りはない。そのためなら己の命さえ惜しいとは思わなかった。

だが、心の底で死ぬるならなんでもいいと思っていたのも事実である。

連日続いた米軍の攻撃や同胞たちの特攻攻撃によって、広人は多くの大切な人を失った。

親に捨てられた自分を拾ってくれた恩人、皆から疎まれていた自分を受け入れてくれた親友や戦友たち、彼にとっては誰もが祖国や天皇陛下と同じかそれ以上に大切な人間である。

それが皆死んでしまった。一人残らず。戦争という蛮行によって

その後に襲ってきた喪失感は凄まじいものだった。それこそすぐに命を絶たなかったのが不思議なくらいに。

その時から、佐上広人という人間は歪んでしまった。彼は一人おめおめと生き長らえた自分に嫌悪感を抱くようになり、苦しみから逃れようと死ぬことに救いを求めた。出撃の前日など大半の隊員が通夜状態なのに彼は一人心踊らせていたくらいである。

国のために死ぬる、ようやく苦しみから解放される、そんな嬉しさが彼を満たしていたのだ。

他の者たちは、なろうことなら死なずに帰りたいと願っていただ

ろう。それは広人にしたって同じだったはずなのに、運命とはなんと残酷なことか。

しかし、結局はまたこうして生き残ってしまった。

ならば、せめて日本人の誇りを胸に腹でも切るのが筋なのだろう。だが、正直今の自分にはそれを実行するだけの気力が微塵も沸かない。

少し前なら自害くらいどうということとはなかった。しかし、それはあくまで“少し前”の話、今は違う。

(……………最低だな。他の英霊たちはほとんどが戦場で命を散らしたっていうのに、俺ってやつは……………)

内心で毒づく。だが、それぐらいで消えてくれる程、この気持ちはヤワではなかった。

「……………俺は」

僅かに震える声で、言葉を紡ぐ。桜花は聞き手に徹するつもりなのか、沈黙を保っていた。

「俺は……………こんなところで死にたくない」

そこまで言えば、あとはすらすら言葉が出てきた。

「恥知らず……と言われても否定できないな。事実その通りなんだから、だが……」

特攻に出たなら、絶対に帰還してはならない。

それが上の人間から与えられた特攻の決まりだ。御国のために死ぬとはそういうことなのである。

それに照らし合わせるなら、広人はここで死ぬべきなのだろう。どのみち帰る場所などない。死んだところでなんの問題もない。

だが、彼はそれを拒んだ。

「俺は、あんなわけのわからん連中に殺されなんて御免こうむる。

……自害なんてのも論外だ」

自らの命でもって責任をとる。聞こえはいいが、結局それは安易な道に逃げているのとなんら変わりないのではないか。

確かに、今この場においては死ぬというのも一つの手段なのだろう。ひょっとしたら英霊たちも自分の死を望んでいるかもしれない。

「靖国でまた会おう！」と皆で誓いながら、自分一人おめおめと行き長らえているのだ。散っていった英霊たちに恨まれ、死を望まれたとしても文句は言えまい。

それならいつそ、命を絶って英霊たちのもとに逝くのが筋なのだろう。彼にしても必要とあらばそうするつもりだ。

だが、何も成さず安易な死を選ぶのは許されざることである。

それに広人は、せつかく拾った命を自ら捨てるというのは生きたいと願いながらも死んでしまった同胞たちに対する冒涇であると考えていた。

（もつとも、それだって結局は都合のいいように解釈しているだけ、大半の連中は俺の考えを認めたりしないだろうがな）

声には出さず、胸中でのみそう呟く。

だが、自分の考えを変えるつもりは毛頭ない。

（非国民と罵るのなら好きなだけ罵るといい。卑怯者と蔑むのならいくらでも蔑めばいい。だが俺は……）

「俺は……これからも生きていく。生きて……戦い続ける」

自分は何と戦えばいいのか、それについてはまだわからない。

それに、彼がこれからやろうとしているのは生きる為の戦いではなく、死ぬ為の戦い……自分の死を意味のあるものにする為だけに、生き続けるという矛盾だ。

（戦って死ぬ。それで……ようやく俺は救われるんだ）

広人の胸中では、そんな歪んだ希望が根付き始めていた。

『……………あなたの言いたいことはよくわかりました』

今まで沈黙を保っていた桜花が言葉を発する。その声音は相変わ

らず感情の伺えない機械的なものだった。

(怒ってるかな。まあ……将来的には自分自身にも始末をつけるつもりだとしても、今俺が言ったのは帝国軍人にあるまじきことだからな。そりゃ失望もするか)

広人は内心で自嘲する。すると、桜花が再び声を発した。

『相棒』

「……軽蔑したか？」

内心で呟いたのと同じく、自嘲的な口調で桜花に問いかける。

きつと失望をあらわになじられることだろう。この時の広人はそう考えていた。

だが、桜花から発せられたのは全く別の言葉だった。

『……あまり私を馬鹿にしなだけでいただけませんか？』

それは、若干の怒りが滲んだ言葉だった。

対する広人は桜花が何を言っているのか理解できず、困惑する。

そんな広人の心中を知ってか知らずか、桜花は呆れと若干の怒りを隠そうともせず、言葉を続けた。

『私は軽蔑する人間を相棒などと呼んではしません。もしもあなたがそのような人間であれば、私は最初から声などかけたりなんて

しませんし、手助けなんて真似もしません。むしろあなたが得体の知れない機械兵器に襲われるのを特等席で楽しんでいたでしょうね』

キツパリとそう断言する。それに対する広人の表情はなんとも言えないものだ。

それに構わず、桜花は尚も言葉を続ける。

『ですが私はあなたに声をかけました。これがどういうことかわかりますか？』

「えっと、つまりアレか？ お前は俺のことを軽蔑したりしていないと？」

戸惑いながらも、広人は桜花の問いに答えた。

『その通りです。ああ最初に言うておきますが、あなたが私のパイロットだからではありませんよ。そんなくだらない理由で助力してあげる程私は甘くはありませんから』

「……………」

広人は桜花の言葉に表情をひきつらせた。こいつ性格歪んでんなあ、という感想とともに。

『私があなたに声をかけたのは、あなたのことを大切だと思っているからです。確かにあなたは陰鬱で、無能で、馬鹿で、役立たたずなどうしようもない人です』

「……………」その評価は酷すぎないか？」

遠慮なくボロクソ言いまくる桜花に広人の心は挫けそうになっていた。

そこで、桜花が『ですが…』と言い、言葉を続ける。

『それでも、そんなあなたでも私の大切な相棒です。私の相棒は世界でただ一人、あなただけ。これはこれから先も覆ることはありません』

そう言う桜花の声は先程の刺々しいものとは異なり、どこか晴れやかなものだった。

『ですから、私は大切なあなたの力になりたい。あなたのためにできることをしたい。そう思ったからこそあなたを助けたのです。そんな私があなただけのことを軽蔑するとも？』

最後に『こんな簡単なことをわざわざ説明させないでください』と付け加える。広人はそんな桜花に思わず苦笑した。

「あれだけボロクソ言われた後で大切だと言われてもなあ」

『事実です。これは言わば愛のムチというやつです』

「……心を深く抉るような愛のムチをどうもありがとうございます」

『どづいたしまして。まあそれはさておき』

広人の皮肉を軽くあしらい、桜花は改めて広人に問う。

『それで？ あなたは生きる意思を固めたということでしょうか？』

「……少なくとも今この場においてはな」

広人がそう答えると、桜花は彼の返事を吟味するかのようになに沈黙する。

『……やはりあなたは死を望むのですね』

広人に聞こえないくらい小さく微かな声でボソツと呟く。デバイスゆえに表情は伺えないが、もしも表情があつたならひどく悲しげな表情をしていたことだろう。

だが、それも一瞬のこと、次の瞬間には先程と同じ機械的な声に変わっていた。

『……わかりました』

そこで一度言葉を区切ると、桜花は改めて広人に言った。

『あなたが生きることが望むなら、戦うことを望むなら、私はあなたの剣となり、この身が朽ち果てるまであなたと共に戦うと誓いましょう』

それは、どこか神聖な響きを持った誓いだった。

広人は突然変わった桜花の雰囲気若干緊張しつつも、一言、しかししっかりと誠意を持って頷く。

「…頼むぞ、“相棒”」

それに対する返答はなく、代わりにデバイスコアが一度だけ淡く点滅した。

それを見た広人は小さく微笑み、その後すぐに表情を引き締める。とその時

キユイイイイ……

「っ!？」

突如背後から機械の駆動音が聞こえ、広人は慌てて背後を振り返った。はたしてそこにいたのは……

「くそつたれがっ!」

広人は思わず叫び、その場から全力で駆け出す。

すると、今さっきまで広人のいた場所にガジェットの放った青いビームが着弾した。

『危なかったですね。食らってたら一瞬で昇天でしたよ』

「ああ、そうだなっ!」

全力で駆けながら、桜花に向かって叫ぶ。そんな広人を急かすように、後ろからはビームの嵐が吹き荒れた。

幸いそのほとんどは乱立する樹木に阻まれ当たらなかったが、木々の間を不規則に走り回ったのが予想外のタイムロスとなって彼我の距離は徐々に縮んできていた。

(まずっ、これじゃ追い付かれる)

広人はすぐ脇を掠めていく青いビームに顔を青くする。このままでは追い付かれるかその前に命中弾をもらうのがオチだろう。

(くそ、どうすりゃいいってんだ)

それでも軍人だ。訓練のおかげで体力にはそれなりに自信がある。

だが、さすがにいつまでも全力疾走を続けていられるわけではない。

(くそ、せめて拳銃でもあれば……)

広人が心中で悪態をついた時、唐突に桜花が声を上げた。

『相棒！ 走りながらで申し訳ありませんが、これから私の言う言葉を一言一句違えずに復唱してくれませんか！？』

「何故！？ それ今じゃなきや駄目なのか！？」

『はい！ これは言わば契約というやつです！ それさえ済ませればあの機械兵器に対抗することも可能になります！』

桜花の言葉に、広人は押し黙った。

(正直、全力疾走しながら喋るってのは結構辛いんだが……そんなこと言ってる余裕はないか)

辛くないと言えば嘘になるが、ここでやらねば犬死に確定だ。

「よし、わかった!」

広人が桜花に言うと、桜花はそのまま言葉を紡いでいく。

『我、使命を受けし者なり』

「我、使命を受けし者なり」

『契約の下、その力を解き放て』

「契約の下、その力を解き放て」

『神は天に、風は空に』

「神は天に、風は空に」

『そして、皇国の兵士の誇りはこの胸に』

「そして、皇国の兵士の誇りはこの胸に」

ここまででは良かった。だが、次の瞬間予期せぬ事態が起こる。

(っ!?)

突如、前方に複数のガジェットが現れ、進路を塞いだのである。

さらに運の悪いことに、広人は木々の密集する林を抜けて、木々のほとんど生えていない開けたところに出てしまった。

それはすなわち、さっきまで木々によって制限されていたガジエットの攻撃と行動が比較的自由になったということである。

(くそっ！)

広人は思わず足を止めた。別方向に逃げる為に急停止したに過ぎないが、それがいけなかった。

(しま　っ！)

周囲をガジエットによって囲まれ、回避も攪乱も不可能になったのである。

『この手に魔法を』

「この手に魔法を」

ガジエットたちが一斉に攻撃を行う。そこからの時間がひどく遅く感じられた。

『桜花、セットアップ！』

「桜花、セットアップ！」

桜花・広人が叫び、二人を光が包み込む。

直後、ガジェットの放った攻撃が着弾し、派手な爆発を巻き起こした。

爆発が起ると、ガジェットたちは一様にメインカメラを爆発の起こった地点とその周辺に向けた。言わずもがな、標的の生死を確認するためである。

だが、それを行うガジェットの数は極端に少なく、ほとんどの機体は残敵の捜索に従事していた。

なにせ規模は小さくとも爆発をゼロ距離で食らったのだ。普通に考えれば生きている方がおかしい。

相手が魔法を扱う魔導師だったならまた話は別だろうが、標的は魔法を使えないただの人間。もはや生死より遺体の損壊状況の方が危ぶまれるところだろう。

例え生きていたとしても無傷とはいくまい。良くて重傷、最悪虫の息、どちらにしたって生き延びることなど出来やしない。

ガジェットのほとんどが残敵の捜索に回ったのはそのためだ。

だが次の瞬間、ガジェットたちはその判断が間違いであることを

その身でもって思い知らされることとなった。

「アクセル・シューター！」

少しずつ晴れてきた土煙の中からそんな声が飛び、直後、幾つもの濃い桜色の光弾が飛来した。

周囲に残っていたガジェットたちはそれに反応するのが僅かに遅れた。ガジェットたちは次々と光弾に貫かれ、ほんの数秒の内に周囲に浮かんでいた全てのガジェットが爆散した。

『ギリギリ間に合いましたね。あと一步起動が遅れていたら二人揃ってあの世行きでしたよ』

「まったく。さすがに肝が冷えたぞ」

土煙が完全に晴れると、そこにはほぼ無傷の広人が佇んでいた。

「……………にしても凄いな、デバイスってやつは」

広人は無惨に切り裂かれたガジェットの残骸を見ながら思わず呟いた。

旧式の銃火器類しか見たことがない広人に見れば、デバイスがもたらした戦果はもはや恐怖すら覚えるようなものだ。たとえ戦車や迫撃砲を用意したとしてもこれには敵うまい。

「なんか服装まで変わってるし、本当にデバイスってやつは底がし

れないな」

広人は自分の服装を確認して、感嘆の声を上げた。

そう、今の彼の服装は先程までの飛行服ではない。

古めかしいゴーグルと首に巻いていた白いマフラーはそのままで、服の方は黒のインナーに白のジャケットに変わり、両手足には籠手と脚甲が装着してある。

「なあ桜花、戦闘能力が高いのは結構なんだが、お前が宝石から棒になったのと俺の服装が変わったのはどういう意味があるんだ？」

『……………棒ではなく杖と言って頂けますか？ 魔法も使えるのですし、棒ではあんまりです』

広人の持っている銀と白を基調とした杖、その赤い宝石部分から桜花の不満気な声が飛んだ。

それに対し、広人は杖を隅々まで観察しながら言った。

「いや、これはどう見ても杖じゃないだろ。なんか機械みたいな外見してるし」

『確かにそうですが、こう見えて一応分類では杖になるんです』

「そうなのか、つくづくわからん世界だな、ここは」

『慣れるしかありません。』

それと服装についてですが、これはバリアジャケットと呼ばれる

もので防護服の役割を担ってくれます。敵の魔法攻撃はもちろんのこと衝撃や気温変化からも守ってくれる優れたものですよ』

桜花が得意気に説明する。対する広人はこの世界の技術力の高さに改めて驚いていた。

(日本とは比べるべくもないな。……………この技術があれば大東亜戦争にだって勝利できたろうに)

それを考えるとほぞを噛む思いになったが、戦争に「」たら「」れば「」を持ち出したところでどうしようもない。

それに、数秒後にはそんなことを考えている暇もなくなった。

『相棒』

「ん？」

『……………来ますよ』

「……………」

何が、とは聞かない。そんなのは聞かずとも想像できたし、そんなことを考えている間に『答え』の方が来てくれた。

「……………さっきより多くないか？」

周囲に展開するガジェットたちを流し見ながら、誰にともなく咳く。

『増援を呼んだのでしよう。まあさつきまで逃げるしかしなかった弱者が突然牙を剥いてきたんですから当然とは思いますが』

桜花は『無駄なことを』という響きを隠そうともせず淡々と言葉を続ける。

総数およそ二十体前後、はたして捌けるかどうか。

『どうします？ 逃げますか？』

「逃げたところで追ってくるだろ、それにただで逃がしてはくれなさそうだ。ならここで戦うさ」

『了解です。私も最大限助力しますが、結局戦うのはあなたですからね。油断は禁物ですよ？』

「わかってる」

答えたところで、ガジェットたちが一斉に攻撃を開始する。その勢いたるや先程とは比べものにもならない。

「じゃあ、行くか。相棒」

『ええ、相棒』

二人は短く言葉を交わし、地面を蹴ってガジェットたちへと向かって行った。

『相棒、たとえあなたが死を望もうと、私があなたを死なせたりなんかしません。……この身に変えても必ず守ってみせます』

桜花の決意は、誰にも聞かれることのないまま戦場の中に消えていった。

第四話「目が覚めたら、そこは異世界だった」(後書き)

毎日友人が死に行くのを見続けていたら人間はどうなるのか、そんな考えから生まれた主人公です。

なお、この主人公の人格はあくまで作者の想像であり、この点に関する抗議は受け付けませんので悪しからず。

## 第五話「それぞれの戦い」(前書き)

更新遅れて申し訳ありません。

そして散々時間を掛けたのにまた駄文になってしまいました。誰か私に文才をおお！！

まあそれはさておき、魔法少女リリカルなのはStrikers  
- 生き残った特攻隊員 - 始まります。それでは本編へどうぞ。

## 第五話「それぞれの戦い」

巨大なディスプレイに、新型ガジェットが爆散する映像が表示される。

「車両内、及び上空のガジェット反応全て消滅！」

「スターズF、レリックを無事確保」

『車両のコントロールも取り戻したですよ、今止めまーす』

次々と伝えられる朗報に、部隊長八神はやては内心ホツとしていた。

（ハードな初出勤やったから一時はどないなるかと思ったけど、怪我人もなく無事に終わってよかったわ）

はやては内心で安堵しつつ、部下である少女に言う。

「ほんなら丁度ええ、スターズの三人とリインはヘリで回収してもらって、そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしよかな」

はやての言葉に、ディスプレイ上のリインは『はいです！』と答えた。すると、はやての横で控えていたグリフィスははやてに問う。

「ライトニングはどうします？」

はやては僅かに表情を引き締め、それに答えた。

「現場待機。現地の局員に事後処理の引き継ぎ」

短くそう言うと、最後にウィンクしながら「よろしくな」と付け加えた。

同時刻某所、白衣を纏った一人の男が、モニターを通して護送されるレリックを眺めていた。

『刻印ナンバー9、護送体勢に入りました』

「ふむ」

『追撃戦力を送りますか？』

「……やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

そう言うと、男の前に新たな映像が表示された。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい」

表示された映像は、スバル・ナカジマ、キャロル・ルシエ、高町なのはの三人。それを見ながら、白衣の男は嬉々として言葉を続ける。

「私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に」

そこで、キャロとなのはの画像が入れ変わり、新たにフェイト・テストロツサとエリオ・モンディアルの動画が表示される。

それを見た瞬間、男はニヤリと笑った。

「この子たち、生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるのだから」

そこで男は唐突に笑い出し、広大な部屋の中には男の不気味な笑い声が反響していた。

本来ならば、この案件はここで終了となるはずだった。

しかし、神の必然か、悪魔の悪戯か、この時から既に運命の歯車

は狂い始めていたのである。

ピーピーピー

「あれ？」

突然、手元のコンソールから無機質な電子音が鳴り、シャリオ・フィニーノー一等陸士は目を向けた。

直後、彼女の表情が次第に驚愕に染まっていく。

「や、八神部隊長！！」

「？ どないしたん？」

突然声を上げたシャリーを疑問に思いながらも、はやては表情を引き締めてそれに対応する。

それに対し、シャリーは目を手元のコンソールに向けたまま、

切羽詰まった声でさらに叫んだ。

「こ、後方より新たなガジェット反応を確認!! 数は10、20、30!! 尚も増加中!!」

「な、なんやて!?!」

シャーリーの報告に、ロングアーチの面々が表情を凍らせる。

はやてもシャーリーの報告に絶句していたが、瞬時に思考を切り替え、部下たちに命令を飛ばした。

「直ちに迎撃!! なんとしてもレリックを死守するんや!!」

はやてが命令を発すると、ロングアーチや現場のフォワードたちから「了解!」という返事が届いてくる。

それに小さく頷きながら、はやては内心に不安を抱えていた。

(隊長陳たちはたぶん大丈夫やろうけど、フォワードには相当な負担を強いることになる。……………完全に油断しとったわ)

内心で歯噛みするが、それでどうにかなるわけもない。

(皆、辛いかもしれへんけど頑張ってたな)

はやてはディスプレイを睨みながら、皆が無事に帰ってくることを切に祈っていた。

また、同じようなことはここでも起こっていた。

ピーピーピー

「ん？」

ディスプレイを埋め尽くさんばかりに表示されたモニターの一つ、それが唐突に電子音を鳴らし始める。

何事かと白衣の男が目を向けると、途端に男は眉を潜めた。

「ウーノ、追撃戦力は必要ないと言ったはずだが？」

男が言うと、ウーノと呼ばれた女性は若干慌てた様子でモニターを確認する。

「……いえ、これは我々の放ったものではありません」

努めて冷静に、しかし僅かに狼狽した口調で、ウーノは男に言った。

すると、男は「ほう」と感嘆の声を上げ、直後にニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「くくく、どうやらレリックを狙っているのは我々だけではないみたいだね」

何がおかしいのか、男は再び不気味な含み笑いを始め、ウーノはそれを意に介することなく言葉を発する。

『追撃戦力を送るべきと判断しますが、いかがなさいますか？』

ウーノが尋ねると、男はしばし考えこむ。

このまま放っておけば、第三勢力にレリックが渡る危険が出てくるだろう。それくらいならウーノの言う通り追撃戦力を送るのが得策かもしれない。

だが

「いや、やめておくとしよう」

『っ！！？』

男の言葉に、ウーノが目を見開く。彼女としても男の言葉は予想外だったのだろう。

だが、すぐに表情を元の無表情に戻し、ウーノは男に言う。

『よろしいのですか？ 万が一ということも……………』

「確かにそうだが、私の作ったガジェットでは戦力不足だよ。送ったところで無駄に撃墜されるのがオチさ」

六課の面々に、送った戦力を壊滅させられたのだ。たとえ新たな戦力を送ったとしても、数や戦力差はどうしようもない。

さらに、男は「それに……」と言葉を続ける。

「つい先程だがね、近くに待機させていた予備のガジェットたちが全て消息を絶った」

「っ!!」

男は何でもない風に言ったが、ウーノは驚愕に表情を強張らせた。

『ドクター、それは……』

「伏兵がいた、ということだろうね。まあ今となっては些細なことさ」

送った戦力が全滅したというのに男の表情は涼しいままだ。まあ送った戦力など、全体から見ればたかが知れているのだが。

「なににしる、私にできることはもう何も無い。あとはゆっくり高見の見物をさせてもらうとするよ」

そう言うと、男は再び笑い始めた。

side - 神倉恭谷

無事にファーストアラートを乗り切り、あとは帰るだけ。そんなことを考えていた時期が俺にもありました。

だが実際は

「恭谷くん！」

「わかってる！」

俺はなのはに返事を返しながら、接近するガジェットたちを見据えた。

何！？何なのあいつら！？ あんなの原作には出なかったよね！？

ガジェットの数は少なく見積もっておよそ80体以上、それも今まで確認していたカプセルや丸や航空機型の個体とは似ても似つかぬ竜型ドラゴンときた。

（くそ、ゾドのデカトドラゴンみたいな形状しゃがって、製作

者の趣味か！？)

ガチであれと似てる。ってか、さっき80以上って言ったけど、もう軽く100は越えてそうな感じに増えてんですが。

『マスター、前方より多数の熱源反応を確認しました。攻撃、来ます』

ナイトハートがそう言った直後、竜型ガジェットどものいる空域からおびただしい量の紅い光条が飛んできた。狙いはまず間違いない俺たちだろう。

「ちっ、アイシクルシールド！」

叫んだ瞬間、目の前に巨大な氷の盾が形成される。

そして、それはこっちに向かって伸びてくる膨大な紅い光条を受けとめ

「なあっ！？」

なかった。

何本かは盾に弾かれたが、ほとんど(割合で言うと五分の四くらい)は何の抵抗もなく盾を通過してこっちに向かって伸びてきた。

「おいおい、冗談だろ！？」

俺は思わず叫んだ。だってそうだろ？ 隕石さえ防ぐことが可能(それが本当は別として)なくらい頑丈な俺の防御がいと簡単に透

過されたんだから。

だが、驚くべきはそれだけじゃなかった。

「……へっ？」

気付けば、そんな間の抜けた声が俺の口から出てきていた。

それもそのはず、何せ盾を透過してきた光条が俺のところにとどり着く前に消えたんだから。

「な、なんなんだ………」

俺は幻影のように消え行く紅い光条を見ながら、呆然と呟いた。

(くそ、一体どうなってんだ。原作にない敵の襲撃が起こるわ、攻撃が盾を透過するわ、挙げ句攻撃が幻影みたいに………ってちよつと待て、幻影だって?)

「まさか………」

『マスター』

思考していると、唐突にナイトハートが言葉を発した。

『分析の結果、前方のガジェットはほとんどが幻影で構成されていることが判明しました。推測するに、先程の敵の攻撃も幻影なのではっ?』

「幻影……やっぱりか………」

なるほど、質量のないただの幻影なら盾を透過して当然。ということ、さっきシールドに弾かれたやつは本物の攻撃ってわけか。……大量の幻影の中に僅かな本物混ぜてくるとは、なかなかウザイことしてくれる。

「ナイトハート、あの大軍の中から本物だけ探ることは可能か？」

『可能ではありません。ですが、かなり巧妙な偽装が施してあるため、ある程度接近する必要がありますし、時間をかけても一度に全てを見つけるのは不可能です』

「……マジツすか」

思わずそう聞き返す俺。正直この返しはちと予想外だった。

(つくづく面倒な連中だな。ってかなんでたかがガジェットが高レベルの幻影魔法使えんだよ。スカさんのAMFなんて比較にならないぞ)

正直な話、こんな状況になるくらいならAMFの方が何倍もマシに思えてくるんですが。あれなら俺にとってはあつてないようなモンだし。

まあ、幻影は幻影で対抗手段がないわけじゃないんですがね。

「……ナイトハート。本物の割り出し状況はどんなもんだ？」

『現在4体……いえ5体の本体と思しき反応を確認しました。……厄介なことに妨害魔法もかけられているらしく、予想以上に個体間

の本体の特定が                    ツ！？    マスター！！』

突然、ナイトハートが声を上げる。まさかこれって……………

『ガジェット群より新たなエネルギー反応を確認しました！ それも先程よりも数が増えています！』

「案の定かよ！？」

予想してたとはいえなんというお約束。まあ数が増えようが、威力が増そうが、やることは変わらんです。

「アイシクルシールド！！」

本日何度目かになる氷の盾を形成、すると、ほどなくして紅い光の束が殺到してきた。

光の束はさつきと同じく、一部が弾かれ、大多数が盾を透過してきたが、その数はさつきのと比較にならない程にまで増えている。

しかもだ、連中撃ってきたばかりだったのにもうエネルギーの収束を始める。明らかに攻撃と攻撃の間のインターバルが短縮されてきていた。

（さて、どうするか。攻撃が盾を抜けてくるなんてことはないとは思いますが、混戦になったら奇襲のオンパレードってことにもなりかねないし。かといってあれだけ精度の高い幻影じゃ並みの魔法で見つけられるわけもないよなあ）

ナイトハートでさえ本物と偽物を特定するのに時間がかかるんだ。

その辺の魔導師やデバイスじゃ話にすらならないかもしれない。

(となると、俺がすべきは一つだけだな)

俺は内心でのみ呟き、ナイトハートに声をかけた。

「ナイトハート。お前が見つけた本物ってどの辺にいる？」

『発見した個体は全て右翼の付け根側に集中しています。ですが、先程も申しましたように、どの個体が本体であるかはまだ特定が済んでいません』

「いや、それだけ分かれば充分だ」

俺はそれだけ言つて、周囲にいくつもの魔法陣(この表現が適切かどうかは各々の判断に任せる)を展開させた。

『マスター？ 一体何を……………』

「いや、待つてても仕方がないんで、お前が目星つけたところをまとめてぶっ飛ばそうと思つて」

そう言い終わる頃には、俺の周囲には結構な数の魔法陣が形成されていた。その数およそ30、はてさて何体潰せるか。

『ぶっ飛ばすとは…………相変わらず無茶苦茶ですね』

「そうか？ でもその方が手っ取り早いだろ？ あっ、索敵は続けといてくれな」

『……了解しました』

さあて、攻撃開始といきますか。

「フリーズ……」

周囲の気温が若干下がる。空気中の水分を集めて凍らせているためだ。

「ランサアアアー!!」

叫んだ直後、展開した魔法陣からおびただしい量の氷柱が射出される。

そして、数秒後には射出された氷柱が右翼側に展開するガジェット群を吹き払っていた。

「おお、すげえ」

自分で言うのもなんだが、何度見ても凄まじい光景だ。

串刺しにしたのがほとんど幻影だったとはいえ、右翼側に展開していたガジェット群はごっそり消えてる。

それに4、5くらい爆発が起こってたから本物の方も確実に墜ちただろう。

(けど、あれだけガジェットがいたのにほとんど手応えがないってのも変な話だよな。後半になればスカ側特製のガジェットがあれと同じくらい出てくるけど、あれにはちゃんと質量もあったし)

うーん、やっぱり手応えがないってのは落ち着かな。どうせなら全部本物だったら良かったのに。

「ナイトハート。今の攻撃でどんだけ落としました？」

『目標、シグナル消失<sup>ロスト</sup>。発見した個体は全て撃墜しました』

おお、やっぱり墜ちてたか。よっしゃ次……ってあれ？ たった今ガジェット群に空けた穴がもう塞がってる。

『早い。既に消えた幻影の補充は完了しているようですね。むしろ先程よりも数が増えています』

ナイトハートが驚きに声を上げる。確かに、さっきあれだけ消したつてのにもう元通り、いやそれ以上に増えてる。幻影を作りだすまでが異常に早え。

「……この辺は流石ってところか。無駄に高性能だな」

ウザイのには変わりないが。せめてスカさんガジェットくらいのスペックで出て欲しかった。

まっそれでも関係ないけどね。幻影が多いならまとめて潰せばいいじゃない？

「ってなわけで次だ！」

『どういいうわけかは知りませんが、新たな反応は感知しましたよ』

さすがはナイトハート。仕事が早くて助かるぜ。

「で？ そいつはどこにいる？」

『下です』

……………はい？

イマナントオツシャイマシタカ？

『下方より複数のガジェット反応を確認。数40、うち37は幻影です。なお、全機攻撃態勢に移行しているため回避か防御か迎撃を推奨いたします』

ナイトハートの言葉に、慌てて下に目を向けてみる。すると

「わお」

大口（口にエネルギー収束させて）開けて急上昇してくる竜型ガジェットたちが目に入ってきた。

そして発見と同時に、収束されたエネルギーが紅い光条となつてこっちに向かってくる。

「うおっ！？」

飛んできた光条を身を捻ってかわす。盾？ これくらいなら普通にかわせるから必要ナッシング。

(つつか、こいつらどっから現れた？ 森の中を通ってきたんなら反応があるはずだし、こんな巨体が動けば嫌でも気付くはずだ)

竜型ガジェットの大きさは翼も入れれば軽トラとだいたい同じくらいだ。空中だろうと森の中だろうとこんなのがこっそり近づいてくるなんてできるわけがない。

(けど、現にこいつらは俺に気付かれることもなく、こっして目の前に現れた)

なんでだ？ くそ、気になるな。

だが、そんなことはお構い無しに、ガジェットどもは間断なく俺に襲いかかってくる。

「ちっ、お呼びじゃねえんだよ!!」

言葉と同時に、ロイヤルソード形態のナイトハートを降り下ろし、大口開けて飛びかかってきた一体を両断する。

手応えは微塵も感じられなかった。

「偽物、次！」

幻影が消えるのも待たず、俺は次の標的を探す。すると、少し離れたところで光条を放とうとしていた個体を発見した。

「グラヴィトン・ブレイク!!」

叫び、光条を放とうとしていた個体に重力子を集中させる。

直後、ガジェットが爆発し、辺りに残骸を撒き散らしながら落下していった。どうやら“当たり”だったらしい。

だが、当たりを引いたのはそれだけ、この後何度もガジェットに攻撃を加えたが、全て幻影だった。

(くそ、ホントうざいな!!)

正直、この戦闘ストレスばかりたまってくる。っつか冗談抜きでうざ過ぎる。

「……いいよ、そっちがその気ならやってやるよ」

誰に言つてもなく呟き、俺は高度を上げ、ガジェット群の真上に抜けた。

下を見れば、置き去りにされたガジェットが逃がすまいと追い縋ってくる。

それに対し、俺は即興でさっきと同じ魔法陣を展開する。

(どうせこの辺には人なんていないんだ。だったら遠慮なくいかせてもらう)

そして、俺は急上昇してくる機械竜たちを睨み、叫んだ。

「フリーズランサアアツ!!」

直後、さっきのに勝るとも劣らない程の氷柱が降り注ぐ。

氷柱は瞬く間に幻影ガジェットどもを風ぎ払い、その中に潜んでいた本体を全て撃墜した。

本日は晴天、なれどところにより氷柱が降るでしょう。

side out

side - 佐上 広人

「な……なあ、桜花？」

「……なんですか？」

一瞬の間を置いて、桜花が言葉を返してくる。

「どうやら俺の言わんとしていることを察してくれたらしい。それなら聞かせてもらおうか。」

「この世界では、雷うみかの代わりに氷柱が降ってくるのか？」

『そんなわけないでしょう。寝言なら寝て言ってください』

桜花が呆れたと言わんばかりの口振りで言う。

即答だなオイ、そしてさっきも感じたが言葉に一切の容赦がないぞ。

「いや……じゃあ……これ何さ？」

俺はたまらず、周辺一帯の地面に突き刺さった氷柱畑を見ながら桜花に問いかけた。

正直、今でも信じられないことなのだが、あてもなく森の中をさまよっていると、突然空から数えるのも馬鹿らしいくらいの氷柱が降ってきたのだ。

（爪先スレスレに氷柱が突き刺さった時は正直生きた心地がしなかったよなあ）

今思い出してみても、かなり肝が冷える思いだった。

俺がそんな風に感傷に浸っていると、桜花は数瞬遅れて質問に答えてくれた。

『分析してみましたところ、この氷柱は自然発生したものではありません』

桜花の言葉に、一瞬我が耳を疑った。

「という事は……やっぱり魔法とやらか？」

『正解です。察しが早くて助かります』

なんと、このおびただしい程の氷柱畑が全て魔法で構成されたものと言うか。

(つくづく非常識というかなんというか……。いや、そもそもこの世界を俺の物差しで測ること自体が間違いか)

俺が困惑しているのを他所に、桜花はさらに説明を続ける。

『より正確に説明するなら、この氷柱は空気中の水分を集めて魔力で凝固、ならば強化を施した人工物です。それを魔力で生み出した推進力で射出する。単純ですが、これ程の規模となると扱えるのは相当な実力者のみですよ』

桜花が驚嘆を交えた口調で言う。だが、俺はというと桜花の言葉の半分も理解できていなかった。

というのも、俺は生まれてこのかた学校に行ったことがないので、このような専門知識が必要になる難しい話は何度聞いたところでよくわからない。現に今だって、この氷柱畑を作ったのは結構な強者だという認識しかないし。

『相棒、今私が話した内容、ちゃんと理解できましたか？』

「すまん、ほとんど理解できなかった」

『でしょっね』

でしょっね、ってお前。分かってんなら聞くなや。

『まあそれはそれとして、そこらの魔導師とは格が違つという認識さえあればそれでいいですよ』

「……………」

なにこの上から目線。俺だって読み書きや簡単な数式くらいならちゃんと理解できるぞ。…………… まあ、強がれる程ではないのは事実だけだ。

「……………で？ お前はただ嫌味が言いたかっただけなのか？」

『とんでもない。この情報社会を生きていくには私が必要になりますよ、とアピールしただけではありませんか』

「あ、あぴーるって何だ？」

『この場合のアピールとはいわゆる宣伝、自分の売り込みですよ。これくらいのことわからないなんて、やっぱり相棒は私がいないとダメな人ですね』

しれつと桜花は言つてのける。心なしか嬉しそうに。

……………確かにお前の言うことももつともだ。だが少しは言い方を考えてくれ。苛々するから。

「……………随分と嬉しそうだな？」

とりあえず苛立ちが表に出ないように努めながら、感情を押し殺した声音で問う。

『当然ですよ。だって……………』

桜花はそこで一度区切り、さらに続けた。

『だって……………自分のパイロットさえ殺してしまうような欠陥兵器だった私が、こうしてあなたのお役に立つことができるんですから。嬉しくないはずないではありませんか』

「っ!!」

桜花の言葉を聞いた瞬間、胸中で渦巻いていた感情が一気に霧散した。

同時に、俺は自分の浅はかさを恥じた。

(そうだった。こいつは兵器で、俺はそのパイロットだったんだ……………)

正直な話、いろいろなことが一度に起こったせいでそのことを失念していた。

こいつは……………桜花は俺と共に多くの同胞が特攻に赴くのを見送った。毎日毎日、出撃前に戦友たちが家族や恋人の写真を見て涙を流しているところもある。

辛かった。もちろん特攻に赴く者の方が辛かったに違いないだろうが、こちらにも仲間を見送る度、戦友と別れる度に辛い思いをして

きた。

恐らく、桜花も俺と同じ、いやそれ以上に辛かったのではなからうか。

俺には桜花の気持ちなどわからない。それどころか、今まで兵器の気持ちなど考えたこともない。

だが、こいつはこいつで苦しみを抱えていたはずだ。しかも苦しみを言葉にして吐き出すことはおろか、涙を流して泣くこともできない。それがどれ程の苦痛か……正直想像もつかなかった。

それを鑑みれば、むしろ言葉を発することができる分俺たちの方が恵まれていたのかもしれない。俺たちは不安や不満をぶちまけたり、泣くことだってできるのだから。

(最悪だな、自分のことで精一杯で、こいつのことちっとも理解してなかったなんて……)

こんなのでよく相棒だなんだと言えたものだ。自分が恥ずかしい。

『……………相棒?』

「……………」

『相棒!』

「ん? あ、ああ。どうした?」

『どうした? じゃありませんよ。いきなり黙りこんで、考えごと

ですか?』

「いや、そんな大したことじゃないさ。すまなかった」

『別にいいですけどね。まあ相棒のことですからどうせくだらないことでも考えていたのでしょうし』

「……………その認識はひでえよ」

『事実でしょう?』

「そこまでくだらないことではないんだが……………」

『……………くだらないですよ』

「ん? 何か言ったか?」

『別に、この付近に敵影は見られませんから先を急ぎましょつと言っただけです』

そこまで長かったか? まあ正論だけど。

「わかった。ならさつさと進」

そこまで言って、言葉を止めた。

「桜花! 参型形態!…!」

『は? いきなり何w「早くしろっ!…!」はい!…!』

訝しげに聞いてくる桜花を一喝し、壱型形態だった桜花が僅かな光とともに参型形態に変わる。

そして、参型《槍形態》になった桜花を両手で握りしめ

「ハアツ!!」

振り返りざまに一閃、振り抜いた。

s i d e o u t

s i d e - 桜花

正直、自分でも浮かれ過ぎていたと思う。

でも、本当に嬉しかったのだ。誰かの……………相棒の役に立てることが。

今更言うまでもないことだが、私は兵器だった。それも上に特攻

と付く。

私は、いや私“たち”は生まれた……生産されたその時から自分の意志があつた。自分が何の為に生み出されたのかも自分たちのパイロットがどうなるのかも全部理解していた。もつとも、それは誰にも気付いてもらえない、分かりやすく形にすることもできない不完全なものだっただけと……。

そのせいで、私たちはそれなりに辛い思いをしてきた。

別に敵艦に突っ込んで果てること自体に不満はない。それが私たちの存在理由なのだから、むしろそれをまっとうできることを誇りに思う。

だが、そこに“人”が絡んでくるのなら話は別だ。

私に限った話ではなく、特攻兵器というものは基本パイロットの操作によって命中までの微調整を行い、パイロットはそのまま機体もろとも敵艦に突っ込む。もちろんパイロットは死ぬ。

私たちが我慢ならなかったのはそこだった。

敵を殺すのはかまわない。それが私の使命だから。だが自分を操作するパイロットまで死なせるのはごめん被る。

それが私たちの共通認識だ。恐らくは他の特攻兵器も（私同様意志があればの話だが）同じだったろう。

だが、私たちがどんなに願おうと、それを伝える（伝えても何も変わらないだろうが）術がないのではどうしようもない。所詮は兵

器、人の手を借りなければ移動もできない鉄屑ということだ。

そして、特攻作戦は決行された。それも数えるのが馬鹿らしくなるほど。

正直、辛いなんて言葉では足りなかったかもしれない。私たちは各々特攻基地に配備にされ、“帰らざる任務”の時まで特攻隊員たちと過ごした。

家族や恋人の写真を見ながら涙を流す者を見かけると、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。一部の隊員たちが私たちを棺桶と呼んでいることを知って傷付いたこともあった。

こんなことなら感情なんて欲しくなかった。

そんなことを考えたのも一度や二度ではない。いるかどうかわからない神に祈ったり呪ったりしたのはそれよりも多い。

だが、どれだけ祈ろうが、どれだけ呪おうが、何も変わらない、何も変えられない。

まるでそれが自分の運命だとも言うように、私たちはパイロットと共に死地に赴く同胞たちを見送りながら、いずれ訪れるであろう最後を待つしかできなかった。

そして、気付けば格納庫を占拠していた他の桜花のほとんどは出撃し、残すは私と新しく配備された数機のみという状況になっていた。これが8月11日のことだ。

あとは知っての通り、私と相棒は特命を受けて8月13日に帰ら

ざる任務に従事し、現在に至る。

(……………まさか黄泉の国ではなく異世界に飛ばされるとは思ってもみませんでしたかね)

内心、この世界に飛ばされてすぐの頃は混乱の極みだった。だが、すぐに思い直したのである。

これは神が与えたもつたチャンスなのではないか、と。

もつ自身の相棒たるパイロットを犠牲にしなくて済むのではないか、と。

そこに思い至った瞬間、混乱など微塵も残さずどこかへ失せた。そしてこれ以上ないくらい気分が高揚していた。

当然だ。これまで自分とその同胞たちが願いつづけたことがようやく現実のものになったかもしれないのだから、喜ぶなという方が無理な相談である。

……………まあ、そのせいでうつかり本音を漏らしてしまったわけだが。それも一番言っではいけない相手に。

(……………まったく情けない話ですね。気分が高揚していたからと言って言う必要のないことまで漏らしてしまうとは、相棒が“こういう”性格だというのは分かっていたはずなのに)

大方この馬鹿のこと、どうせ自分のことで手一杯で私の気持ちを

何も理解してなかったとかなんとか思っているに違いない。断言できる。

相棒は些細なことでもすぐに自分で背負い込もうとする。そういう人だから。

現に今だってほら

「そこまでくだらないことではないんだが……………」

ほら、そう言うあなたの表情、苦笑しようとしてひきつっているの、ちゃんと分かっていますか？

自分のことで手一杯、それが当然なことなのに、まったくこの人は……………。

『……………くだらないですよ』

本当に、“そんな”くだらないこと考えている暇があるなら少しは自分の心配もして欲しいですよ。

「ん？ 何か言ったか？」

おっと、聞こえないように呟いたと思ったのですが、予想外に地獄耳ですね。

『別に、この付近に敵影は見られませんから先を急ぎましょうと言っただけです』

そう言うと、相棒は多少訝しみながらも、それ以上は追及してこな

かった。

「わかった。ならさっさと進

」

そこまで言ったところで、相棒は突然喋るのを止めた。

一体どうしたというのか、心なしか表情も硬くなっている。

「桜花！ 参型形態！！」

私が相棒に話しかけようとした直後、相棒は声を荒げて言った。

(……………はい?)

突然何を言い出すのかと思えば、たった今私がこの付近に敵はいないと言ったばかりではないか。

現に、もう一度広域スキャンで周辺一帯を確認してみたが、敵影らしき反応は何も発見出来なかった。

『は？ いきなり何w「早くしろっ！！」はい！！』

相棒がさらに声を荒げる。私はそれに気圧されながらも、すぐに壱型から参型形態に切り替えた。

時間にしておよそ数瞬、しかし相棒はそれすらも惜しいと言わんばかりに槍形態となった私を両手で構え、背後を振り返る時の遠心力も利用して、勢いよく斬撃を繰り出した。

無論、さっき言ったようにそこに不審なものは何も存在しない。

ただ周囲と同じく林立する木々が見えるだ

ギイイーン！！

『っ！？』

けじゃない。何かいる！！

確かにそこには“見た限り”何も無い。だが、その何も無いところから確かに金属質の何かの質量を感じた。

幸いなことに“それ”の強度はあまり強くないらしく、感触からして相棒が切りつけた箇所は無事切断されているらしかった。

その証拠に、数瞬遅れて何もなかったところからつつすらと頭部を失った機械仕掛けの竜が現れ、さらに数瞬後には機械竜の頭部が落下してきた。

恐らくは上空で別の魔導師たちと戦闘を行っていたガジェットの一部だろう。だが、今重要なのはそこではない。

(しまった！ ステルス迷彩か！！)

相棒がここまで切羽詰まった声を上げるのも珍しいとは思っていたが、まさかこういうことだとは……………完全に私の落ち度だ。

(なんてこと、あれだけ自信満々に言っておきながらこんな致命的なミスを犯すなんて……………)

失敗なんて言葉じゃ片付けられない。もし私が人間なら腹を切つて詫びなければならぬレベルだ。

一歩間違えれば死んでいたのは相棒の方がもしれないのに、それを私は敵はいないなどと……………

「カプセル型の次は西洋の竜か、どれだけ種類があるんだよ」

相棒が頭部と身体を切断されたガジェットを見ながら、呆れ口調で言う。だが、私は何か返事を返す気力さえ沸かなかつた。

「ん？ おい、どうした桜花？」

返事がないと不審に思ったのか、相棒が声を掛けてくる。心配してくれているのだろう。この人の性格的に。

(まさかこの人に心配されるとは、つくづく情けない限りですね……………)

私を気遣ってくれるのは純粹に嬉しい。だが、今の私にはそれさえ傷に塩を塗るのと同義だ。

だから、より一層申し訳ない気分になる。どうして自分はこうなのだろう、と。

だが、いつまでもへこんでいるわけにはいかない。

まだ戦闘は終わっていないし、何よりこんなことでは今度こそ相棒を死なせてしまう。

だから、今はこの“負”は私の中で押し殺す。

『……………いえ、なんでもありません』

ようやくそれだけ言うことが出来た。

後悔も反省も自己嫌悪もあとでいくらでもできる。今すべきは己の使命をまっとうすることのみ、すなわち全力で相棒と共に戦うだけだ。

「……………本当か？」

相棒が疑わし気な目を私に向けてくる。つくづく鋭い。自分のことはいい加減なくせに。

『もちろんです。今のは少し考えごとをしていただけ、心配はご無用です』

「……………ならいいけどな」

相棒はそれだけ言うと、それ以上は追及してこなかった。

少し後ろめたい気もするが、相棒にこれ以上余計な負担をかけるわけにはいかない。嘘も方便というやつだ。

『そつえば相棒、あなたに聞きたいことがあるのですが』

「聞きたいこと？」

『はい。先程襲ってきた竜型ガジェットのことですが、ステルス迷彩に光学迷彩まで展開されていたのに何故気付いたのですか？』

話と気分を切り替えるために聞いた質問だが、相棒はまたもや顔をしかめて困惑していた。

「す、すてるすって……………何？」

ああ、そうだった。相棒には通じないんだね。

『簡単に説明すると、ステルスとはレーダー、いわゆる電深等に探知され難くする軍事技術の総称です。』

また、光学迷彩は自身の色や模様を背景に合わせリアルタイムに変更することによって視覚的に偽装する、または光を透過・偏向させて見えなくする技術のことです。あの機械竜が搭載していたのは後者の方ですね』

私がそう説明すると、相棒は驚いた様子で目を丸くしていた。

「そんなものが存在するのか、なんだかここに来てから驚いてばかりだな」

『仕方ありませんよ。この世界の技術力は我々の想像の遥か上をいつていますし……………って、それはいいんです。私は何故相棒が機械竜の接近を感知出来たのかを聞いているんです』

危つく話が脱線するところでした。場所が場所ですし、早くしないとまた機械竜が来てしまいますからね。

「あゝ、それなんだけど、何て説明すりゃいいの……」

「……勘とかはなしですよ？」

「いや、勘っていつかなんというか……気配を感じたから？」

「あなたは何処の達人ですか!？」

この返答は予想していなかった。ついでに予想の範疇も越えていた。

「いや、ハツタリとか冗談じゃなく本当に。自分でもよくわからんが突然後方から何かが近付いてくる感じがしてな。そんで確認もせず振り返りざまにお前を振るったんだ。そしたら“こいつ”に当たった」

「……………」

(何て無茶苦茶な、常人よりも気配を察知する能力が鋭いというのはなんとなく知っていました、まさかここまでとは……………)

驚く私を他所に、相棒は戸惑いつつもさらに言葉を続ける。

「なんにしても、攻撃食らう前に気付けたのは助かった。振り返ったらすぐ機械竜が俺を噛み砕こうと大口開けてきたのは正直怖かったが……………」

そう言う相棒の表情は恐怖のためか若干強張っていた。

(私にとっては相棒の勘こそ恐ろしいものだと思いますが………つて、あれ？ 相棒今何て？)

『相棒、あなた今機械竜が大口開けてたつて言いましたか？』

「そう言ったが、それがどうした？」

『どうしたではありません。機械竜は光学迷彩によって視認出来なかったはずですよ。なのに何故そんなことがわかるのですか？』

もちろん光学迷彩も万能というわけではない。光の反射の具合でうつすらと見える時もあるが、あの短時間でそこまで見えたとは思えない。

それを考えると、相棒だけ普通に視認できていたことになるが、さすがにそれはな

「何言ってるんだ？ ちゃんと見えてたじゃないか」

くなかったですね、はい。

『相棒、馬鹿も休み休み言ってください』

「……………信じることから全て始まると前に本で読んだことがあるんだが」

『素晴らしい言葉ですね。素晴らしい過ぎて反吐が出ます』

「ちょっとは信用しろよ。確かに色が薄いつてか半透明だったけど、しっかり目で見える薄さだったろ？」

まだ言いますか、やれやれ。

『相棒、いい加減に「ちょっと失礼」は？』

何を突然と思ったのも束の間、相棒は再び私を振り回し始めた。

まず後方、さっきと同じように振り返った時の遠心力を利用して槍を横風ぎに振り抜く。

バギン！！

衝撃音が響くと、相棒は槍を構えたまま身を低くする。直後、背後から凄まじい風切り音が鳴らしながら頭上を“何か”が通過し、間を置かずに相棒が槍の柄頭で刺突を繰り返す。

ゴガッ！！

柄頭に衝撃が走る。だが相棒は意に介すことなくその場から飛び上がり、相棒は地面に向けて全体重が乗った一撃を叩きつける。

グシヤ！！

三回目の衝撃音、それを最後に相棒は構えを解いた。

「…………ふう、危ない危ない」

程なくして、音の鳴った場所の景色が歪む。そこから現れたのは、やはりというか例の機械竜だった。

『……………』

私はあまりのことに絶句した。

相棒が見えない敵に対して一方的な攻撃を加えたこともそうだが、私が何より驚いたのはこの場に現れた機械竜たちが全て頭部を粉碎されていたということだ。……………光学迷彩が展開されていたにもかかわらず、である。

(まさか……………、相棒は本当に?)

今だに半信半疑だが、このような芸当を見せられては信じざるをえない。これを偶然で済ますには正直無理がありすぎる。

『……………どつやら、ただの嘘というわけでは無さそうですね』

「だから、さつきからそう言ってるだろ?」

ようやく信じたか、そんな考えが言葉の節々から伝わってくる。

まったく、すぐに信じられるわけないでしょう。肉眼で光学迷彩を破れるなんてどんなチートですか。

(さっきの立ち回りといい、光学迷彩を簡単に破ってしまうことと

いい、つくづく底が知れない人ですね。敵じゃなくてよかった)

そう考える反面、自分の不甲斐なさに若干苛立ちを覚える。

自分で言うのもなんだが、私はあらゆる性能面で高水準であると自負している。元となったデバイスの性能がどれ程かわからない以上安易に比較はできないが、少なくともその辺のデバイスよりは勝っているはずだ。

だというのに、先程から私は連続で敵の接近を許してしまっている。それも敵の接近を欠片も感知出来ずにだ。

迷彩がどうかそんな言い訳にならない。結局のところ、守れなければ何も意味がないのだ。

だったら、今の私は……………

「おい、桜花。……………大丈夫か？」

唐突に相棒が声を掛けてくる。それで我に帰った。

『問題ありません。それで、なんですか？』

こつこつという絶妙なタイミングで声を掛けるあたり、少しだけ相棒が恐ろしくなる。それだけ感情の変化に機敏ということだろうが、相棒のそれは少しばかり度を越してるように思える。

「新手だ。上空十時方向から3体、同じく五時方向から4体、いけるか？」

『……………はい』

まただ、また外れた。

私の調べでは、十時方向の反応は45、五時方向には何も無い。視覚情報も同様だ。完全に敵の術中に嵌まってしまっているということだろう。

(まったく、ここまで見事に外れると涙の一粒でも出てきそうです。……………いえ、出ませんけど)

せめてもう少し高性能だったなら、こんな思いもせずに済んだのに。まあ贅沢言っても仕方がないでしょうけど。

「桜花、さつきカプセル型に撃った光の玉『アクセル・シューター』  
そくだそれ、10発ぐらい頼む」

『了解しました』

「ん、あと……………」

相棒はそう言いながら槍を構え、ゴーグルを装着する。一見ただのゴーグルだが、これには望遠機能や照準機能を始めとした各種機能が搭載されているのだ。

相棒が敵がいるであろう方角に目を向ける。曰く敵が攻撃範囲に入るまでもう少しかかるらしい。

そして、上空を隈無く見据えながら私に言った。

「桜花、お前ひよつとして……機械竜を見つけれなかったことを悔いているのか？」

『……………』

「図星か。まあ心中は察するよ。だがな、“その程度”のことでお前が自分のことを役立たずだと思っているのなら、そいつは筋違いつてもんだ」

筋違い？

沈黙を貫くつもりだったが、相棒の言い草に我慢出来ず、私は反論した。

『筋違いなものですか。下手すれば首を転がしていたのはあなただったかもしれないですよ？ 私が一番に気付かなければいけないのに、なのにあなたは私が役立たずではないと言っているのですか？』

「当たり前だ。俺はお前にできないことを要求するつもりもないし、無理にできるようなれとも言わない。それにお前の力は索敵だけじゃないだろ。そんな些細なことはいちいちへこむな」

相棒から辛辣な言葉が飛ぶ。それが私をさらにムキにさせる。

『ふざけないでください。索敵が戦闘を行う上でかなり重要であることはあなたも承知しているはずですよ。それができないどころか誤報ばかりする私の何処が役立たずではないと言っているのですか。慰めなど不要ですよ』

そこまで言うと、相棒が眉を顰めた。

「いい加減に

」

言葉は最後まで続かなかった。

何故？ 上空から紅色の光条が降り注いできたからですよ。

でも、相棒はそれを器用に避けながら、言葉を続けた。

「拗ねるのもいい加減にしろよ。確かにお前のミスは致命的だ。もし俺が気付いてなけりゃ本当に死んでたかもな。

だがな、お前の仕事は“俺とともに”に戦うことだろ」

相棒は降り注ぐ光条を（どうやら幻影の方も本物と偽物の区別がつからしく）必要最低限の動きだけで回避しつつ、さらに言葉を続ける。

「俺が言えた義理じゃない。けど敢えて言わせてもらおうぞ」

そう言うと、相棒は回避行動を取っているのにもかかわらず、私に目を向けた。

「一人で戦おうとするな！俺はお前の相棒で、お前は俺の相棒だろぅが！

相棒ってのは互いに支え合うもんだろぅが、だったら俺のことも少しはあてにしろ！」

『！！』

相棒の言葉に、私は言葉を失った。

……ああ、そうだった。わかっているつもりでわかってなかったのは私の方だったんですね。

どうやら私は一人で全てを背負うことに目を向けるあまり、相棒というのがどういう存在かを履き違えていたようだ。

『……まったく、相棒にこんなこと言われるとは思ってませんでした。そろそろ私も焼きが回ったのかもしれないですね』

「年寄りくさいこと言ってんじゃねえよ。お前に焼きが回っていいうといなかるうと、お前にはまだ戦ってもらうぞ」

言い切り、回避に専念していた相棒が動きを止める。

「行くぞ相棒、反撃開始だ！」

『了解です』

言って、周囲に10発程のアクセル・シューターを出現させる。だがまだ撃つ時ではない。

『相棒、私にはどこに本体がいるのかわからないので座標指定をお願いします』

「あいよ」

私では誤情報に惑わされて本体を見つけないことができない。故に相棒の目に頼る必要がある。

代わりに、私はまだ魔法を使うことに慣れていない相棒に代わって魔法の演算処理を行う。

（足りない部分は互いに補い合えばいい。そんな簡単なことさえ気付いてなかったとは、相棒には感謝しないといけませんね）

思考しつつ、相棒の指定した座標を入力していく。これで一応は大丈夫だろう。

『座標入力完了。いつでも発射可能です』

相棒は小さく頷く。そして

「撃つ」

『All right . fire』

直後、濃桜色の光弾が一斉に射出される。

光弾は指定された座標通り、上空の機械竜の元へ向かっていく。哀れ、どいつも砲撃態勢を取っていたため、回避行動すら取れない様子だった。

そして、終わりの時がくる。

ゴガンー！！

上空にていくつもの爆発が発生する。燃料にでも引火したのか、

やたらに派手な爆発だ。

「た〜まや〜」

『か〜ぎや〜』

戯れついでにそんなことを言ってみる。その間に敵反応の有無を確認する。

『敵機7、爆発を確認。幻影も全て消失ロストしました』

「砲撃態勢に移ってたのが良かったみたいだな」

ですね、じゃなかったらたぶん迷彩展開してた方には当たらなかったでしょうし。

『ですが相棒、そう喜んでももらえませんよ』

「やっぱりか、まあそうなるだろうとは思ってたが……………」

あれ程の規模の爆発だ。他の機械竜にバレずに済むはずがない。恐らくは魔導師たちも同様だろう。

「ということとは……………また新しいやつが？」

『来るでしょうね。まず間違いなく』

あまり相手にしたくはありませんが、ここまでやった以上は相手するほかないでしょう。

『それと相棒、機械竜だけでなく魔導師の方にも充分注意してください』

ある意味機械竜よりもそっちの方が厄介ですからね。言葉が通じる分こちらのの方が幾分かマシでしょうが。

「……………まあ、努力はするさ」

『お願いします。敵である確証はありませんが、かといって味方である保証もありませんからね』

まあ、どちらだろうと彼らが私たちを見逃してくれるはずないでしょうね、最悪の場合言葉は通じてても話は通じないということもありそうです。

「おっと、そうこうしているうちに追加が来たみたいだな」

相棒が空を見上げたまま言う。その先にはかなりの数の機械竜がいた。

『総勢357、そちらはどうですか？』

「全部で24体、加えて迷彩で隠れてるやつが7体いる」

やはり私の調べと大幅に異なる。しかし、先程とは違って苛立ちや焦りは微塵も感じない。

（余裕ができたからなのでしょうね。この程度のことでは相棒の手を煩わせてしまったのは恥ずかしい限りですが）

だが、もう同じ轍を踏んだりはしない。この戦闘、相棒とともに乗り越えてみせる。

「桜花、壱型に戻してくれ」

言われ、私は形状を参型から壱型に戻す。先程とは異なり、近接戦より射撃戦がメインとなるからだろう。

「さて、さっさと片付けるか」

『ええ、準備は万端。いつでも行けます』

それに答えるべく、相棒の周囲に新たな光弾を出現させる。これだけあれば幻影の中の機械竜どもを屠るには充分事足りるだろう。

もちろん、機械竜とて何もしないわけではない。

こちらの準備が完了するのとほぼ同時に、機械竜どもが一斉にこちらに向かって急降下してくる。その勢いたるや、まるで滝か雪崩のようだ。

一瞬だけそのあまりの勢いに圧倒されそうになるが、相棒は堰を切ったように降下してくる機械竜を見据え、先程と同じく、ポツリと呟いた。

「撃つ」

次の瞬間、滞空していたアクセル・シューターが全て射出され、機械竜の群れへと突入していく。

そして、その数秒後には複数の爆音が大気を振るわせ、空を埋め尽くさんばかりに展開していた機械竜が跡形もなく消失していた。

『反応24、並び反応7、全ての撃墜を確認。おかげでかなり機械竜が減りましたね』

「ああ。だがどうせすぐに元通りになるだろうな。それに今の俺たちの位置が割れた」

相棒が苦い表情で言う。

確かに、さっきの攻撃だけなら敵の数も幻影の規模も少なく、“私たちがいる”というのはわかってても“私たちが何処にいる”のかまではわからなかっただろう。さらに言うなら、戦闘に忙殺されて私たちの存在に気付かなかった可能性もある。

だが、今度は先程とは規模が格段に違う。

爆発だけならまだしも、軽く三桁を超す敵の幻影が跡形もなくごとそり消えたのだ。それは私たちの存在を大々的にアピールしたことに他ならない。

敵の中で私たちの優先順位がどの位置にあるかは知らないが、これだけ敵を勢いを削いだのだ。程なくすれば敵が大挙して押し掛けてくるであろう。

「……………そんなことになれば、今度こそ終わるかもな」

苦笑いを浮かべながら相棒が言う。だが、言葉とは裏腹に目は死んでいない。

『大丈夫ですよ』

私は言う。気休めや冗談ではなく、心の底から。

「根拠は？」

『片方だけなら無理でしょう。ですが私の攻撃力と相棒の探知能力、この二つを合わせればあんな機械竜など即効で撃破できます。私たちなら、ね』

私の言葉を聞くと、相棒は苦笑した。

「なるほど、そいつは名案だ」

言いながら、再び集結しつつある機械竜を見る。ようやく敵も本腰を入れてきたのか見た目の規模も段違いだ。“向こう”でも相変わらず戦闘は続いているみたいだが。

『……………相棒』

「ん？」

『必ず、生き残りましょう』

「……………ああ」

短く答え、相棒は薄く微笑んだ。それが本心からか、上辺だけなのかはわからないが。

(いや、今はそれがどちらだろうとかまわない。でも、いつか私が相棒を変えてみせる。心から生き残りたいと思わせてみせる)

私は決意を新たに、気持ちを新たにシューターを展開する。指定座標も入力済みだ。

そして、ほぼ同じタイミングで機械竜が再び濁流となって急降下してくる。

「戦闘開始だ。準備はいいな？」

『とつくに、誰が相手だろうと負けませんよ』

私が答えると、相棒は無言で頷いた。そして

「撃<sup>て</sup>つ」

相棒の号令とともに、私は展開した全てのシューターを飛ばす。

そして、撃ち出されたシューターは全て機械竜の波の中に吞まれていき、数瞬後には複数の爆発が空に響き渡った。

side out

side - 高町なのは

私たちは突然現れた未確認ガジェットの集団に苦戦していた。

確かに、個体ごとの強さはさして高くない。でも、そんなのなんの慰めにもならない。

(くっ…………、数が多過ぎるよ)

上下前後左右、どこを見ても必ず視界がガジェットで埋め尽くされる。これじゃあ個体ごとの強さなんて関係無い。

恭谷君が言うには、このガジェットはほとんどが幻影で構成されているらしいけど、どれが本物なのかがわからなきゃ目につく全てのガジェットを攻撃するしか対処する術がない。

「デイバイイン」

こっちに向かってきたガジェット5体に対し、レイジングハートを構え、魔力を集中させる。

「バスター!!」

直後、レイジングハートがデイバイン・バスターを発射して、凄まじいスピードで迫っていたガジェットを飲み込む。すると、中心にいた個体だけが火花を散らして爆散した。

(これだけ撃って、ようやく4機目撃墜か。あと何機落とせば終わ

るんだろう……)」

アクセル・シューター、デイバイン・バスター、スターライトプレイヤーSLB、どれくらい同じことを繰り返しただろう。

撃つても撃つてもヒットするのは幻影ばかり、おまけにその幻影でさえ消えたはしからまた現れる。完全に敵のペースだ。

「予想はしてたけど、想像以上に辛いね……」

本当に、体力的にはまだ何とか大丈夫だけど、精神的にはかなりキツイよ。

こんなこと言うのは不謹慎かもしれないけど、これならまだいつも相手にしているガジェットの方がマシかもしれない。

確かに、あのガジェットのAMFは厄介だけど、逆を言ったら厄介なのはそこだけ、少なくとも幻影を空を埋め尽くす程出現させて、その中から隠れて撃ってくるっていうやり方よりは格段にやりやすい。

(まあ、どっちも厄介であることには変わらないんだけどね)

内心で呟きながら、ガジェットが密集している空域に向かってデイバイン・バスターを放つ。

案の定ほとんどが偽者だったけど、一体だけ本物が混ざっていたらしく、幻影が掻き消えた後で小規模な爆発が起こった。

そして、仕返しだと言わんばかりの勢いで全方位から光条やミサ

イルが飛んでくる。

「くっ!!!」

私は僅かな隙間を縫うようにして次々と飛来する攻撃を躲して行く。幸い直撃は免れたけど、何発かが身体を掠めたらしく、バリアジャケットが所々破れて血が滲んでいた。

(さすがに、そろそろマズイかも……………)

幸い傷は浅く痛みは無い。でも、傷を負ったってことはじわじわと追い詰められてるってことだね。

(なるべく敵の密集してる所は避けるようにしないと……………)

掠めただけだから良かったものの、次もこれで済むとは限らない。

もし一発でも直撃もらうことになったら命の保障はない。最低でも重症は免れない。

(ということは、また“あの時”みたいなことに……………)

その考えに思い至った瞬間、私は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

思い起こされるのは八年前の雪の日。

今でも鮮明に覚えてる。身を裂かれるような痛み、マトモに動かすこともできない自分の身体、家族や仲間たちに心配をかけたことに対する申し訳なさ。

そして、何よりも忘れられないのが、もう飛べないかもしれないと言われた時の絶望だった。

（あの時はリハビリのおかげでなんとかまた飛べるようになった。でも次は……………）

きつと、次はない。

「なのはー!!」

「!?!? フェイトちゃん!!」

思考が恐怖一色に塗り潰される寸前、私はフェイトちゃんの声で我に帰った。

「っ!?!? なのは、血が……………」

「ちよつと掠っただけだよ。心配ないから」

心配そうな顔をするフェイトちゃんに、私は笑って答える。

本当は笑ってる余裕なんてないんだけど、フェイトちゃんに余計な心配はかけたくなかったから。

「そう? ならいいんだけど……………」

「それを言ったらフェイトちゃんだって、ボロボロだよ?」

「わ、私は大丈夫だから」

「どっちもどっちだよ。お前らに関しては」

「「恭谷（君）！？」」「

いつの間にか、恭谷君が私たちと並走していた。

さすがは特務部隊隊長というべきか、こんな乱戦の中でも全くの無傷だった。

「お前ら二人は昔から無茶ばかりかしてるからな。特になのは」

「わ、私？」

「そうお前。無茶ばかり続けたらどうなるか、忘れたわけじゃねえだろ？」

「……………うん」

言った直後、またあの時の恐怖がぶり返してきそうになり、私は慌ててそれを振り払った。

「で、でも今は多少無茶したってガジェットを止めないと……………」  
「別に無茶すんなどは言わねえよ。ただ無茶は程々にしとけてこ  
とだ」

そう言った後、恭谷君は複雑そうに顔をしかめた。

「けどまあ、こんな状況じゃそうも言ってもらえないな。俺たちはまだしも、ティアナたちの方が持たねえ」

「うん、でも……このままじゃ私たちだって危ないよ」

「だよな。クソっ、こんなことならもう一人二人連れくるんだった」

恭谷君が苦々しげに呟く。

フェイトちゃんの言う通りだ。いくら私たちがガジェットの間闘になれてるからって、このガジェットは今までのと勝手が違う。今はまだ大丈夫でも、こう幻影ばかりに消耗を続ければそのうちこっちが負ける。

(なんとかしないと、このままじゃティアナたちだって……………)

「(な、なのはさん!!)」

回避行動を取りながら思考していると、突然ティアナからの念話が届いた。何かあったのか、やけに切羽詰まった口調だ。

「(ティアナ! 何かあったの?)」

私が聞くと、ティアナは切羽詰まった口調のまま言葉を続けた。

「(が、崖の上からいきなり人が落下してきて、着地するなりスバルに斬りかかって……………)」

「……………」

その言葉に、私たちは驚愕に目を見開いた。

「(スバルは無事なのか?)」

「(は、はい。幸い浅く斬られただけなので怪我は大したことありません。ですが……………レリックを奪われました……………)」

「……………!?!」

その言葉を聞いた瞬間、私たちは青ざめた。

「(い、今その人物と戦闘状態に陥っています。ですが質量兵器の……………機関銃で武装していて手が出せません!“彼女”が離脱する前に至急援護をお願いします!!)」

質量兵器という言葉に、私は身を固くした。

「(ティアナ! 待ってて、今行くから!!)」

「(いや、俺が行く。質量兵器の相手ならくさる程やってきたからな)」

「(そんな! 危ないよ!!)」

「(危ねえのは皆一緒だろ。だったら少しでも銃器のこと知ってる俺がやった方が適役だ)」

……………確かに恭谷君の言う通りかもしれない。

特務部隊は主に一般局員の手に負えない凶悪犯罪等を担当するため、部隊員は隊長から一隊員に至るまで全て精鋭ばかりで構成される。

現に恭谷君だつてこれまでに数多くの武装組織を壊滅させてきた。

その過程で質量兵器と接する機会なんてたくさんあっただろうし、実際に相手にした回数だつて一度や二度じゃないはずだ。

経験は豊富。むしろこの状況において、これ以上ないくらいの人材かもしれない。

「……恭谷君。気をつけてね?」

「なのは!?!」

「ごめん、フエイトちゃん。でも、やっぱりここは恭谷君に任せの方がいいと思うんだ。ちょっと気になることもあるし……」

「気になること?」

「……さつきガジェットどもがまとめて消えたことか?」

恭谷君の問いに、私は頷いて答える。

初めは気のせいかと思つてた。それが確固たるものになつたのはついさつき、今ガジェットが集まるところから無数の爆発が響いてきた時だ。

こつちも回避や戦闘で休みなく動き回つてたからはつきりは見えなかつたけど、幾つか小さな爆発が起こつたと思つた瞬間、突然リニアと正反対の空域に集まつたガジェットが全部まとめて姿を消した。

普通に考えれば、ただ本体が撃墜されたっただけなんだろうけど、私が気になったのはその場所だ。

あの時、あの空域近辺には私はもちろんフェイトちゃんも恭谷君もいなかった。

だからガジェットを撃墜するなんて不可能だし、仮にSLBやフリーズランサーみたいな大魔法でまとめて凧ぎ払ったとしたも、それに気付かないはずない。

だったら、どうしてガジェットは撃墜されたのか？

その疑問の答えはついさっき判明した。

「さっきレイジングハートが教えてくれたんだけど、さっきガジェットたちが消えた時、そのすぐ側で魔力反応を感知したみたいなんだ」

「！ それってつまり……………」

「うん。敵か味方かはまだわからないけど、私たち以外にも魔導師がいて、あそこで戦ってるってことだよ」

私がそう言うと、フェイトちゃんは目を見開き、恭谷君はやっぱりかという表情をした。

「だから、少し確かめたいんだ。その人がどういつ目的でこの戦闘に参加してるのか」

戦ってるってことはガジェットの間じゃないのは確定なんだけど、この童型ガジェットとは別にレリックを狙ってきた魔導師なのか、それとも単に巻き込まれただけなのか。

前者なら逮捕して話を聞かなきゃいけないし、後者なら助けなきゃいけない。心情的には後者であることを祈るばかりだ。

「なるほどな。まあそっちは二人に任せるよ」

「うん。恭谷君も気をつけて」

「おう、任せとけ。」

それとフェイト。過保護者ぶり発揮するのはエリオとキャロだけで充分だって

「か、過保護者って……………」

「え？ もしかして自覚なし？ って、今はんなことどうでもいいんだ。とにかく、こつこついう質量兵器扱ってる犯罪者の相手は俺が一番慣れてんだよ。だから俺に任せろって」

「……………恭谷、怪我しないでね？」

「まあ努力はするさ。じゃあ、引き続きガジェットどもの相手は頼む」

「了解！」

そう答えて、私たちは散開した。

自分のすべきことを完遂するために。

side out

side - 神倉恭谷

「ティアナ！ スバル！」

「恭谷さん！」

俺の呼び掛けに、スバルが返事を返す。見れば近くにキヤロもいる。

ティアナはエリオと一緒に件の乱入者と対峙していた。

「スバル、傷は大丈夫か？」

「は、はい。斬られたといっても傷自体は浅いんで、今キヤロに治してもらってます」

よく見れば、スバルの腕から血が滴っており、それを見たキヤロが顔を蒼白にしながらも傷口に治療術をかけていた。

「その分なら傷の方は大丈夫か。キャロ、辛いかもしれないけども  
う少し頑張ってくれ」

「は、はい」

言葉を交わした後、俺はティアナとエリオのところに向かう。

「悪い、待たせたな」

「恭谷さん。いえ、ありがとうございます。助かりました」

ティアナが目を乱入者に向けたまま短く言う。エリオは喋る余裕がないのか黙ったままだ。

そして俺も件の乱入者の方を見据える。体格と体のラインからして女であることはわかった。

(……………なんか、間近で見ると奇妙な格好のやつだな)

まず頭と顔をフルフェイスの……………なんだ？ 鉄仮面？ 兜？ とにかくヘルメットみたい丸みを帯びた防具で隠している。

服装はノースリーブのインナー、ミニスカとスパッツみたいなものを着用し、腕は露出し手だけにグローブを嵌めている。

唯一脚だけは膝まで脚甲で覆っているが、これは防御というより蹴りの威力を上げるためのもののように思えた。

(防御とかほとんど考慮に入れてない、完全に動きやすさ重視の服装だな)

それが見た感じの率直な感想だった。防御が少ないのは自信があるのか、単なる馬鹿か、たぶん前者だな。

見た感じ結構な手練れっぽいし、少なくともその辺の犯罪者より強敵なのはまず間違いない。

(けど、やっぱり一番厄介なのは……………)

俺は女が右手で構えた機関銃に目を向けた。

大きさからして恐らく50口径、とても女が片手で扱える武器とは思えないが、女は苦もなく片手で構えている。

(こいつ、何者だ?)

考えたところでそう簡単に分かるもんでもないだろうが、とりあえず普通じゃないのは確かだろう。あんな機関銃を片手だけで構えてられるやつなんて他に見たことないしな。

「恭谷? ……そうか、貴様が神倉恭谷か」

不意に女が防具の下からくぐもった声を発する。その口調は「してやられた」とでも言いたげな、苦々しげなものだった。

「……………俺のことを知ってるのか?」

「むしろ知らない人間なぞいるまい? なるほど、厄介な援軍を呼んでくれたものだ」

そう言い、女はティアナの方を向いた。対するティアナは女の方を警戒しつつ、口元に笑みを作った。

「正直私たちだけじゃあなたの相手は荷が重い。でも恭谷さんは私たちのようにはいかないわよ？」

「確かに、19という若さで管理局最強とまで言われた男だ。私一人が何をどうしようとする男には敵うまいよ」

そう言いつつも、女は構えた機関銃を下ろそうとはしない。どうやら言葉とは裏腹にまだ抵抗をするつもりらしい。

「……………レリックをこちらに渡して自首しなさい。今なら罪は比較的軽くて済むわ」

ティアナがクロスミラーージュを構え、エリオも無言でストライダー構える。

「こいつの言う通りだ。おとなしく言うこと聞いてくれりゃあ全て丸く収まる。だが、あくまで抵抗するってんなら……………」

そして俺もナイトハートの切っ先を女に向けて牽制する。女が少しでも妙な素振りを見せたらすぐにも攻撃に移れるように。

本当ならすぐにも攻撃に移りたいが、レリックが相手の手にある以上は下手な真似はできない。もしレリックに攻撃が当たれば俺たち全員ただじゃ済まないからな。

「なるほど、貴様らの言いたいことは理解した。しかし、私にも事情があるのでな。貴様らには悪いがその要求、呑むわけにはいかん

のだ」

そう言うと、女は左手に抱えていたレリックを背中に回し、固定する。完全に逃走の姿勢だ。

「……交渉決裂。お前正気か？」

多勢に無勢、いくらこいつが強かろうと、たった一人で俺たち全員を出し抜くなどほぼ不可能だろう。にもかかわらず女は余裕を崩さない。

「安心しろ。私はいたって正常だ。それに……」

そこで、女はふと俺たちの後方に視線を向ける。

「どうやら……運は私に味方したみたいだからな」

「……どうという意味だ」

いつでも斬りかけられるようにしつつ、俺は女に問う。すると、女は無言で俺たちの後方を指差した。

(後ろ？ つ！？ まさか………！！)

「な、なのはさん……！！」

俺が最悪の考えに至った直後、悲鳴じみたスバルの叫びが聞こえ、俺たちは反射的に背後を振り返った。

そこで俺たちの目に飛び込んできた光景。それは………

「うそ………」

「そんな………」

「っ！…！　なのはぁ！…！」

【エースオブエース】高町なのはが地上に向かって真っ逆さまに落下していく光景だった。

第五話「それぞれの戦い」（後書き）

次回こそは主人公と六課の邂逅を書いていきます。

たぶん時間がかかるかもしれませんが、出来る限り早く仕上げて投稿します。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3449v/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers - 生き残った特攻隊員 -

2011年10月29日02時05分発行